

杉谷4号墳

— 第1次発掘調査報告書 —

2014年3月

富山大学人文学部考古学研究室

二〇一四年三月

富山大学人文学部考古学研究室

2014年3月

富山大学人文学部考古学研究室

杉谷4号墳

— 第1次発掘調査報告書 —

杉谷4号墳

— 第1次発掘調査報告書 —

2014年3月

富山大学人文学部考古学研究室

例　言

1. 本書は、富山大学人文学部考古学研究室（歴史文化コース考古学教育研究分野）が、平成24（2012）年度に実施した、富山県富山市杉谷2630（富山大学杉谷キャンパス内）に所在する杉谷4号墳における第1次発掘調査の成果報告である。
2. 杉谷古墳群内の古墳名称は、遺跡台帳の登録では杉谷4号古墳となっているが、本書では杉谷4号墳とする。なお、1番塚古墳と2番塚古墳、3番塚古墳については、このままでする。
3. 発掘調査は、富山市教育委員会の協力を得て、富山大学人文学部考古学研究室の構成員が中心となり実施した。
4. 報告書の作成は、5で記す教員と学生が中心となり調査参加者全員が協力して行った。写真撮影は高橋が行った。
5. 本文の執筆及び製図、写真図版作成は、次山淳（富山大学人文学部教授）、高橋浩二（富山大学人文学部准教授）、金田朋子、小谷望有季、清水俊輝、寸田彩加、山場愛弓（以上、富山大学人文学部学生）が担当した。
6. 本書の編集は、高橋浩二が担当した。
7. 調査図面及び写真等は、富山大学人文学部考古学研究室で保管している。
8. 本書の作成にあたっては、安念幹倫氏、伊藤雅文氏、岡田一広氏、岡本淳一郎氏、河村好光氏、後藤浩之氏、関清氏、田邊朋宏氏、林大智氏、藤田富士夫氏、古川登氏、御嶽貞義氏、村田裕介氏、安中哲徳氏、吉田有里氏、富山市教育委員会の方々からご教示ならびにご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
9. 本書は、平成23年度富山大学学長裁量経費（学長の判断に基づく機動的な配分経費）及び平成24～25年度富山大学人文学部傾斜配分経費（フィールドワーク・実験系教育支援経費）の活動成果を含むものである。

杉谷4号墳 第1次発掘調査報告書

目 次

例 言

第1章 調査経過

1 調査に至る経緯.....	次山 淳.....	1
2 調査経過と調査組織	金田朋子・高橋浩二.....	3

第2章 杉谷古墳群の立地と周辺の古墳・遺跡.....	小谷望有季・高橋浩二.....	6
----------------------------	-----------------	---

第3章 研究史

1 富山市教育委員会による調査の成果	高橋浩二.....	12
2 北陸における四隅突出型墳丘墓の調査・研究史	高橋浩二.....	18
(1) 北陸における四隅突出型墳丘墓の調査史	高橋浩二.....	18
(2) 北陸における四隅突出型墳丘墓の研究史	清水俊輝・山場愛弓.....	23

第4章 発掘調査の成果

1 基準点と調査区の設定.....	次山 淳.....	25
2 発掘調査の成果		

(1) 第1調査区	小谷望有季・山場愛弓・高橋浩二.....	29
(2) 第2調査区	金田朋子・清水俊輝・寸田彩加・高橋浩二.....	34

第5章 出土遺物

.....	金田朋子・小谷望有季・清水俊輝・寸田彩加・山場愛弓・高橋浩二.....	39
-------	-------------------------------------	----

第6章 まとめ.....	高橋浩二.....	41
--------------	-----------	----

図 版

抄 錄

図版目次

- 写真図版1 1 杉谷4号墳全景（北東から）
2 発掘前全景（北東から）
3 同上（西から）
4 調査区設定作業
5 発掘調査作業
- 写真図版2 6 周溝検出状況（北から）
7 同上（南西から）
8 第1調査区土器検出状況（返し付蓋）（東から）
9 第1調査区土器検出状況（大形壺）（東から）
10 第2調査区土器検出状況（大形壺）（北から）
- 写真図版3 11 周溝完掘状況（北から）
12 同上（東から）
- 写真図版4 13 周溝完掘状況（南西から）
14 第1調査区周溝底面の状況（南から）
15 同上（北から）
- 写真図版5 16 第1調査区南側断面（北から）
17 第1調査区南側断面ピット検出状況（東から）
18 第1調査区周溝アゼ断面（北から）
19 第1調査区西側断面（東から）
20 第2調査区完掘状況（東から）
21 第2調査区周溝底面の状況（北西から）
- 写真図版6 22 第2調査区周溝底面の状況（西から）
23 第2調査区東側断面（西から）
24 第2調査区西側断面（東から）
25 大形壺頸部
26 返し付蓋
- 写真図版7 27 出土遺物

挿図目次

第1図 第1次発掘調査参加者	4
第2図 杉谷古墳群と杉谷A遺跡（古川1999を一部改変）【寸田彩加 作成】	7
第3図 杉谷4号墳と杉谷A遺跡 (富山市教育委員会1975を一部改変)【寸田彩加 作成】	7
第4図 杉谷古墳群の立地と周辺の古墳・遺跡【小谷望有季 作成】	8
第5図 杉谷4号墳測量図及びトレンチ配置図 (富山市教育委員会1974に加筆)【寸田彩加 作成】	13
第6図 杉谷4号墳トレンチ断面図 (富山市教育委員会1974に加筆)【寸田彩加 作成】	14
第7図 杉谷4号墳出土土器（富山市教育委員会1974）	16
第8図 北陸における四隅突出型墳丘墓の分布【清水俊輝・山場愛弓 作成】	24
第9図 調査区基準杭配置図【山場愛弓 作成】	26
第10図 調査区配置図【山場愛弓 作成】	27～28
第11図 第1調査区平面図・断面図【小谷望有季・山場愛弓 作成】	31
第12図 第1調査区土器分布図【小谷望有季・山場愛弓 作成】	32
第13図 第2調査区平面図・断面図【金田朋子・清水俊輝・寸田彩加 作成】	35
第14図 第2調査区土器分布図【金田朋子・清水俊輝・寸田彩加 作成】	37
第15図 土器出土状況【清水俊輝 作成】	38
第16図 出土遺物【金田朋子・小谷望有季・清水俊輝・寸田彩加・山場愛弓 作成】	40
第17図 第1調査区・第2調査区平面図【金田朋子・小谷望有季 作成】	42
第18図 第1調査区・第2調査区土器分布図【小谷望有季・寸田彩加 作成】	43
貼付図 杉谷4号墳測量図	

表目次

第1表 第1次発掘調査の作業経過【金田朋子 作成】	5
第2表 調査区基準杭一覧【山場愛弓 作成】	25

第1章 調査経過

1. 調査に至る経緯

標高 60～70m の杉谷丘陵は、富山平野を東西に二分する呉羽丘陵の南西端に位置する。杉谷古墳群は、この丘陵上の三つの平坦面のうち南東部平坦面の南の縁辺にそって展開する 11 基からなる古墳群である。

この古墳群の内容が明らかになったのは、1974（昭和 49）年に富山市教育委員会が実施した確認調査の成果による⁽¹⁾。1 番塚古墳、2 番塚古墳、3 番塚古墳、4 号古墳、5 号古墳、6 号古墳、7 号古墳についてトレンチ調査がおこなわれ、墳形等の確認がなされた。とりわけ 4 号墳については、その墳形が山陰地方に特徴的な弥生墓制である「四隅突出型」とされたことから全国的にも大いに注目を集めた。

その後、杉谷丘陵には「国立富山医科大学」の新設計画が進められたが、古墳群そのものは学術的な価値からも建設予定地から除外されるとともに、県有地として保存されることになった。

2004（平成 16）年の「国立大学法人法」施行を受けて、富山県内に所在する 3 国立大学（富山大学、富山医科薬科大学、高岡短期大学）が統合され、翌年 10 月に新富山大学（富山医科薬科大学は医学部・薬学部、高岡短期大学は芸術文化学部）が発足した。この統合にともない、県有地であった「古墳群」の土地が大学に移管され、以後富山大学が所有・管理し現在に至っている。

富山大学では、杉谷古墳群がキャンパス内に所在する貴重な歴史的遺産であるという認識から、学術研究の対象とすることや遺跡そのものを広く公開すること、地元の方々が取り組んだ杉谷古墳群顕彰事業⁽²⁾の熱意を受け継ぐこと、さらに古墳群の内容を明らかにする新たな発掘調査の必要性などの観点から、現状の維持・管理ならびに文化財としての保存・活用についての検討が行われた。

一方、人文学部考古学研究室は、以前から富山県を中心とした「北陸地方における古墳出現過程の研究」を研究テーマのひとつとして取り組んできたことから、弥生時代墳墓との関連性を色濃くとどめる杉谷古墳群は、研究・教育の両面において好適なフィールドと考えられた。そこで、平成 21 年度に 3 カ年にわたる杉谷古墳群の発掘調査を計画し、関係機関との調整をおこなった。幸いにも地元の方々ならびに関係各位の理解と協力を得られるところとなり、調査の実施にいたることとなった⁽³⁾。

第 1 年次（平成 22 年度）および第 2 年次（平成 23 年度）は、杉谷 6 号墳を対象に測量調査およびトレンチによる墳丘の発掘調査を実施した⁽⁴⁾。

第 3 年次にあたる本年度は、調査計画に従い対象を 4 号墳に移し、東側突出部の調査を計画した。2012 年 6 月 20 日付けにて、文化財保護法第 92 条第 1 項の規定にもとづく埋蔵文化財発掘調査届を富山市埋蔵文化財センター経由で富山県教育委員会に提出し、同年 7 月 30 日より調査を開始した。調査の終了は 8 月 31 日である。

現地での調査にあたっては、富山大学人文学部ならびに杉谷キャンパスの教職員の方々にさ

さまざまななかたちでご配慮をいただいた。上記の各位、各機関と併せてここに感謝の意を表する。
なお、本調査は、平成 24 年度人文学部傾斜配分経費（フィールドワーク・実験系教育支援経費）
の配分を受け実施したものである。

（次山 淳）

注

- (1) 富山市教育委員会 1974『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』
- (2) 「杉谷 4 号墳と四隅突出墳」出版事業編集委員会 2009『海を越えての交流—杉谷 4 号墳と四隅突出墳—』古沢校下ふるさとづくり推進協議会
- (3) 黒崎 直 2012「調査に至る経緯」『杉谷 6 号墳—第 1 次発掘調査報告書—』富山大学人文学部考古学研究室
- (4) 富山大学人文学部考古学研究室 2012『杉谷 6 号墳—第 1 次発掘調査報告書—』
富山大学人文学部考古学研究室 2013『杉谷 6 号墳—第 2 次発掘調査報告書—』

2. 調査経過と調査組織

調査は、事前準備として 2011（平成 23）年 10 月に、株式会社 共和に依頼して 3 級基準点及び 4 級基準点の設置と 3 次元測量を実施した。本調査期間は、2012 年 7 月 30 日～8 月 31 日である。杉谷 4 号墳の第 1 次調査では、四隅突出型埴丘墓の東側突出部及び周溝の形状と規模の確認、そして築造時期を解明するための土器資料を得ることを主たる目的に発掘調査を実施した。調査経過は次の通りである。

初日の 7 月 30 日は、コンテナハウスを搬入した後、調査地区的除草作業を行った。また、昨年度に設置した 3 級基準点及び 4 級基準点の確認をした後、トータルステーションを使用して第 1 調査区と第 2 調査区を設定した。

7 月 31 日は、発掘機材を搬入した。そして、第 1 調査区と第 2 調査区の発掘前写真撮影後、発掘を開始した。

8 月 1 日には、第 2 調査区において富山市教育委員会による発掘時（1974 年）の旧トレント跡を確認し、これと今回調査区との位置関係図を作成した。また、第 1 調査区、第 2 調査区ともに、突出部外側に存在する周溝の掘形を検出した。

8 月 3 日は、第 1 調査区、第 2 調査区における周溝検出状況の写真撮影を行った。その後、周溝内の掘り下げをすすめていった。その過程で、第 1 調査区でも同様に富山市教育委員会による旧トレント跡を確認し、これと今回調査区との位置関係図を作成した。

8 月 8 日は、第 2 調査区北壁の断面図を作成した。また、周溝内にて大形壺を検出した。

8 月 9 日は、第 2 調査区で検出した大形壺の出土状況を写真撮影した。

8 月 10 日は、第 1 調査区において返し付蓋を検出し、出土状況を写真撮影した。第 2 調査区では大形壺出土状況の平面図と調査区南壁の断面図を作成した。

8 月 20 日は、第 1 調査区では南壁・西壁の断面図の作成及び写真撮影を行った。第 2 調査区では東壁・西壁の断面図を作成した。

8 月 21 日は、第 1 調査区では前日に引き続き西壁の写真撮影を行った。また、北壁の断面図を作成した。第 2 調査区では東壁・西壁の断面図を作成した。その後、トータルステーションを使用して、平面図作成のための 1m 方格のグリッドを設定した。

8 月 22 日は、第 1 調査区でも同様に 1m 方格のグリッドを設定し、その後、平面図の作成を行った。第 2 調査区では平面図を作成するのと並行して、西壁の断面図作成と東壁の写真撮影を行った。

8 月 23 日は、第 1 調査区、第 2 調査区とともに引き続き平面図を作成した。

8 月 25 日は、第 1 調査区、第 2 調査区において完掘状況の写真撮影を行った。

発掘調査の結果、第 1 調査区、第 2 調査区において突出部を取り巻く周溝と突出部基底部の形状が確認された。周溝の断面形は逆台形を呈する。周溝は、第 2 調査区西側では幅約 4.5m、深さ約 1.5m、第 1 調査区南側では上面幅約 2.0m、深さ約 0.8m を測る。したがって、周溝は突出部基部に近い側では幅が広く深いが、突出部前面部にいくと幅が狭く浅い構造であることが明らかになった。また、突出部は先端に向かって大きく広がる形状になることが確認された。周溝内からは約 700 点の土器片などが出土した。

8 月 27 日には、調査成果について、報道機関への発表を行った。

8月28日は、現地説明会の準備を行った。その後、第1調査区、第2調査区ともに周溝内各箇所の写真撮影を行った。

8月29日には、現地説明会を開催した。現地説明会の参加者は約60名であった。現地説明会終了後は、調査検出面の標示と遺構面の保護を目的として山砂を入れた後、埋戻し作業を開始した。

8月30日には、埋戻し作業が完了した。

8月31日は、発掘機材とコンテナハウスの搬出を行った。 (金田朋子)

調査にあたっては富山市教育委員会、古沢校下ふるさとづくり推進協議会々長、古沢校下自治振興会々長、杉谷地区自治会長、友坂地区々長ならびに地区的皆様に多大なご協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。 (高橋浩二)

杉谷4号墳第1次発掘調査組織

調査主体：富山大学人文学部考古学研究室（歴史文化コース考古学教育研究分野）

調査代表者：次山 淳（富山大学人文学部教授）

調査担当者：高橋浩二（富山大学人文学部准教授）

調査参加者：三好清超（以上、富山大学大学院人文科学研究科学生）

井上恭一、今井翔、大澤拓馬、工藤海、三宅克幸、金田朋子、小谷望有季、清水俊輝、寸田彩加、山場愛弓、岡山充味、菅野友希、小林史佳、藤井奎臣、吉田皓
(以上、富山大学人文学部考古学研究室学生)

幾島悠、奥勇介、高見淳人、成田千里、船越楓、山口七奈枝（以上、富山大学人文学部1年生）

舟崎久雄（富山大学大学院人文科学研究科修了生）



第1回

第1次発掘調査参加者

第1表 第1次発掘調査の作業経過

	全体	第1調査区	第2調査区
7/30	コンテナハウス搬入、除草作業、 基準点確認、調査区設定		
31	機材搬入	写真撮影、発掘開始	
8/1			写真撮影、発掘開始
2			旧トレンチ平面図作成
3		写真撮影、旧トレンチ平面図作成	
4	休み		写真撮影
5			
6			
7			
8			断面図作成、大形壺検出
9			大形壺の写真撮影
10		返し付蓋検出、写真撮影	断面図・大形壺の平面図作成
11~15	盆休み		
16			
17			
18			
19	写真撮影		
20		断面図作成、写真撮影	断面図作成
21		断面図作成、写真撮影	断面図作成、グリッド設定
22		グリッド設定、平面図作成	平面図・断面図作成、写真撮影
23		平面図作成	平面図作成
24	休み		
25	完掘状況写真撮影	写真撮影	写真撮影
26	休み		
27	報道機関発表	平面図作成	
28	現地説明会準備	写真撮影	写真撮影
29	現地説明会	埋め戻し	埋め戻し
30			
31	機材搬出、コンテナハウス搬出		

■■■■■ は各調査区における発掘期間を示す ■■■■■ は各調査区における埋め戻し期間を示す

第2章 杉谷古墳群の立地と周辺の古墳・遺跡

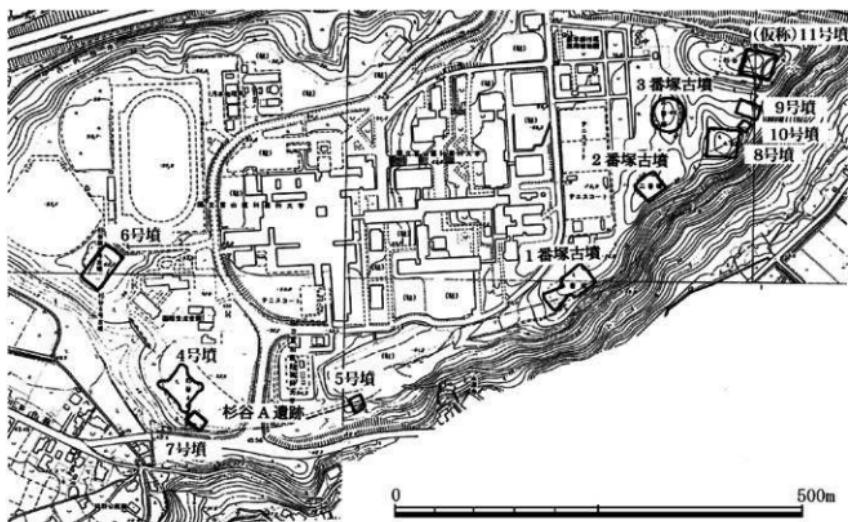
杉谷古墳群は、広大な富山平野を東西に二分するにある呉羽丘陵に所在する。呉羽丘陵は南西から北東方向へ伸びる細長い独立丘陵で、全長は約7kmに及ぶ。富山県のほぼ中央に位置しており、ここを境にして東を「呉東」、西を「呉西」と今では呼び習わしている^①。呉羽丘陵は、富山市中心部に面する丘陵東側斜面が急崖をなし、麓には神通川とその支流の井田川が並行して流れる。射水市に面する丘陵西側斜面は所々にひらけた比較的緩やかな斜面の広がりが見られ、約10km西にある庄川との間に田園地帯が形成されている。

杉谷古墳群は、呉羽丘陵の南西端に発達した杉谷丘陵（友坂段丘）の、標高約50～70mの南西端部から南東端部にかけて立地する。ここからは富山平野を流れる神通川や井田川、また富山平野越しに立山連峰の山並みを望むことができる。富山湾からは約7km内陸へ入った所に位置する。富山大学医学・薬学部（旧富山医科薬科大学）の校地となってからは一帯に関連施設が建ち並び、古墳群のある場所はこれらの施設を取り巻く竹林及び緑樹帯となっている。大学の開設以前は、杉谷丘陵一帯には茶畠が営まれていた。

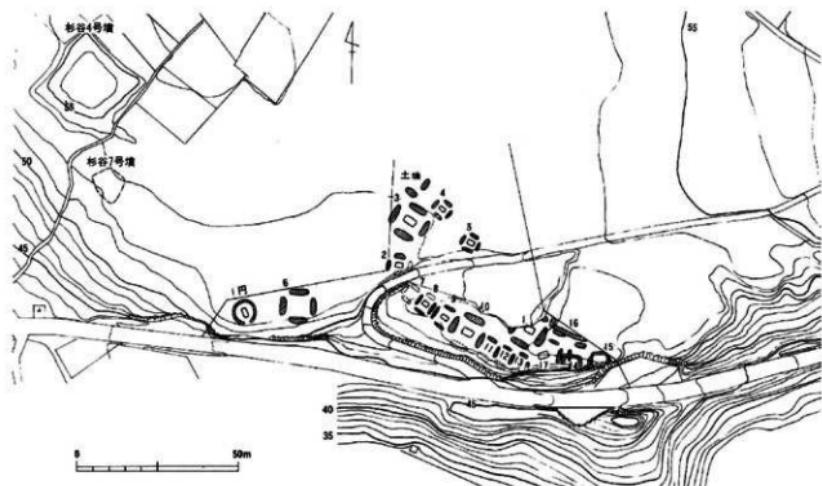
杉谷丘陵上で人々が活動をはじめたのは旧石器時代に遡る。現在は汚水処理所となっている場所の杉谷H遺跡からは旧石器時代のナイフ形石器1点とフレイク数点が出土している。縄文時代草創期の遺物としては、杉谷A遺跡から頁岩製石槍や杉谷遺跡から安山岩製有舌尖頭器が出土している。杉谷古墳群の北側を横断する北陸自動車道内の杉谷64番遺跡からは縄文時代早期から前期の押型文土器が出土している。杉谷遺跡からは縄文時代中期の堅穴住居跡14棟、土坑6基、集石2基が弧状に並び、東向きに開口する環状集落が確認されている。また、内陸河川や富山湾での網漁をものがたる36点の石錐が出土している。杉谷G遺跡からは斜位の条痕文が施された縄文時代晩期の土器が出土している（富山市教育委員会1975・1976）。

弥生時代になると、後期までの遺跡はほとんど未確認だが、終末期頃から杉谷古墳群の築造が開始される。杉谷古墳群は四隅突出型墳丘墓1基（4号墳）と前方後方墳1基（1番塚古墳）、円墳1基（3番塚古墳）、長方墳（6号墳）1基、方墳6基、墳形不明1基の合計11基で構成される（富山市教育委員会1974a、富山大学人文学部考古学研究室2012・2013）。また、杉谷4号墳の南東約80mにある杉谷A遺跡からは、4号墳とほぼ同時期の方形周溝墓16基と円形周溝墓1基が発見され、1号墓（鉄鉗1点とガラス小玉）や2号墓（鉄素環頭刀1点とガラス小玉）、3号墓（鉄素環頭刀1点と鉄鉗4点、ガラス小玉）、10号墓（銅鐵1点とガラス小玉）、17号墓（鉄劍1点とガラス小玉）などから副葬品が出土している。このほか、弥生時代終末期の月影式に比定される甕や広口壺、台付装飾壺、高杯、器台、鉢が出土している（富山市教育委員会1975）。なお、杉谷古墳群に対応する基盤集落は現時点では未確認である。

次に、呉羽丘陵の周辺に範囲を広げて、杉谷4号墳と同時期の墳墓や遺跡について概観する。井田川支流である山田川南岸の富崎丘陵北東端部に立地する富崎墳墓群は、3基の四隅突出型墳丘墓からなる。1号墓は一辺約21.7mの方形部に、長さ約6mの突出部が付く。2号墓は東西約17m以上、南北約15m以上の方形部に、南西側で長さ6.3mの突出部が付く。1号墓・2号墓ともに築造時期は弥生時代後期後半から終末期に位置づけられている。3号墓は長さ22m、



第2図 杉谷古墳群と杉谷A遺跡（古川1999を一部改変）



第3図 杉谷4号墳と杉谷A遺跡（富山市教育委員会1975を一部改変）



第4図
（国土地理院5万分の1地形図「富山」八尾を改変）
杉谷古墳群の立地と周辺の古墳・遺跡

幅 21m の方形部に、長さ 4m 以上の突出部が付く。築造時期は弥生時代後期後半に位置づけられ、富山県内では最も古い四隅突出型墳丘墓に比定される。富崎墳墓群の基盤集落としては、約 170m 東の丘陵麓にある富崎遺跡が考えられている。また、富崎墳墓群の西側には高地性集落と推測される富崎赤坂遺跡と離山砦遺跡が存在する（婦中町教育委員会 2002）。

山田川北岸の河岸段丘南端部には、2 基の四隅突出型墳丘墓からなる鏡坂墳墓群が所在する。1 号墓は一辺約 24.1m の方形部に、長さ 4m 以上の突出部が付く。2 号墓は一辺約 13.7m の方形部に、平均で長さ 3.75m の突出部が付く。築造時期はともに弥生時代終末期に位置づけられている。鏡坂墳墓群の基盤集落としては、約 250m 南東にある鍛冶町遺跡が考えられている（婦中町教育委員会 2002）。

山田川のさらに支流である辺呂川北岸の河岸段丘端部には、四隅突出型墳丘墓の六治古塚が立地する。一辺約 24.5m の方形部に、平均で長さ 7.2m の突出部が付く。築造時期は弥生時代終末期に位置づけられている。近接する向野塚は墳長約 25m の前方後方形周溝墓で、六治古塚に後続することが推定されている。約 350m 北東の下位段丘にある千坊山遺跡からはほぼ同時期の堅穴住居跡が 24 棟検出されており、六治古塚・向野塚の基盤集落と考えられている（婦中町教育委員会 2002、大野 2007）。

未発掘だが四隅突出型墳丘墓の可能性があるものとして、呉羽丘陵に立地する呉羽山丘陵 No.6 古墳、呉羽山丘陵 No.10 古墳、呉羽山丘陵 No.18 古墳が挙げられる。方形部隅角が外方に突出するなど、外形象的に四隅突出型墳丘墓を思わせる要素を備えている（富山市教育委員会 1984）。

神通川下流西岸の呉羽丘陵北端には百塚遺跡が立地する。一帯からは弥生時代後期から古墳時代後期にかけての方形周溝墓 14 基、円形周溝墓 6 基、方墳 3 基、円墳 2 基、前方後方墳 2 基などが確認されている。方形周溝墓（SZ10）の埋葬施設から、県内では最多となるガラス小玉 110 点が出土している（富山市教育委員会 2012a）。

統いて、古墳時代前期・中期・後期の古墳と遺跡について順に概観する。まず、杉谷古墳群から約 2.5 km 南西には、墳長約 66m の前方後方墳である勅使塚古墳がある。前期前半段階の土器が出土しており、定型化した前方後円（方）墳としては県内で最も古い古墳の一つに挙げられる（富山県文化振興財团 2003 ほか）。ここから谷を挟んで約 0.4 km 北には、墳長約 58m の前方後方墳である王塚古墳がある。未発掘だが、墳丘形態などを根拠に、勅使塚古墳の次代の首長の古墳と判断される（高橋 2006・2007a）。富崎墳墓群の南に近接しては、前方後方墳 1 基、円墳 1 基、方墳 15 基の計 17 基からなる富崎千里古墳群が築かれる。古墳群の最高所に築かれた墳長約 34m の前方後方墳である 9 号墳は、出土土器から勅使塚古墳とほぼ同時期に比定されている。勅使塚古墳が単独墳で、約 2 倍の規模をもつことから鑑みると、富崎千里 9 号墳はより下位の首長の古墳と判断される（婦中町教育委員会 2002、高橋 2005）。これらの前期古墳と

第4図 杉谷古墳群の立地と周辺の古墳・遺跡名

1. 百塚・百塚住吉遺跡
2. 呉羽山古墳
3. 番神山横穴墓群
4. 呉羽山丘陵 No.26 古墳
5. 呉羽山丘陵 No.16 古墳
6. 呉羽山丘陵 No.18 古墳
7. 西金屋センガリ山窓跡
8. 古沢窓跡群
9. 古沢塚遺跡
10. 古沢塚山古墳
11. 呉羽山丘陵 No.10 古墳
12. 呉羽山丘陵 No.6 古墳
13. 杉谷 G 遺跡
14. 杉谷 H 遺跡
15. 杉谷遺跡
16. 杉谷 A 遺跡
17. 杉谷古墳群
18. 二本榎古墳
19. 王塚古墳
20. 勅使塚古墳
21. 向野塚古墳
22. 六治古塚
23. 千坊山遺跡
24. 鍛冶町遺跡
25. 鏡坂墳墓群
26. 富崎遺跡
27. 富崎墳墓群
28. 離山砦遺跡
29. 富崎赤坂遺跡
30. 富崎千里古墳群
31. 南部 I 遺跡

の関連性が考えられる集落としては南部Ⅰ遺跡がある。南部Ⅰ遺跡からは弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡や土器が検出されている（婦中町教育委員会 2002）。杉谷古墳群から約1km北東の呉羽丘陵には、墳長約38mの前方後円墳である呉羽山丘陵No.16古墳がある。未発掘だが、前期古墳と推定されている（岸本 1992）。杉谷古墳群から約5.5km北東の呉羽丘陵北端部には、百塚住吉遺跡がある。ここからは弥生時代後期後半から古墳時代前期の方形周溝墓や方墳、円墳とともに、墳長約18.5mと約14mの前方後方形周溝墓（前方後方墳）2基と、墳長約24mと約21mの前方後円墳2基が検出されている。前方後円墳は2基とも墳裾部に溝を巡らす、周溝墓と共通したパターンのものであり、出土土器からも県内最古の前方後円墳と評価されている（富山市教育委員会 2009）。

中期古墳には、杉谷古墳群から約0.5km北東の呉羽丘陵に所在する古沢塚山古墳がある。墳長約41mの前方後円墳である。墳丘は、呉羽丘陵上の多くの古墳が丘陵東側に面するのに対して、丘陵西側に面して築かれている。また、墳丘主軸を呉羽丘陵の走向とは直交する北西—南東方向にとっており、多くの前方後円（方）墳が丘陵の走向に沿って概ね北東—南西方向へ向けていているのとは、やや異質な様相である（高橋 2007b）。古墳時代中期の集落遺跡としては、呉羽丘陵の西麓に境野新遺跡や古沢A遺跡がある（富山市教育委員会 1974b・1983）。

後期古墳には、呉羽山丘陵No.16古墳に隣接する所に、墳長約20mの前方後円墳である呉羽山丘陵No.26古墳が知られる。未発掘だが、前方部が大きく開く形態を根拠に、後期でも新しい時期の富山県最後の前方後円墳と評価されている（岸本 1992）。杉谷古墳群から約3.8km北東には、長さ約4.5mの両袖式の横穴式石室をもつ呉羽山古墳（墳形・規模不明）がかつて存在した。金銅装頭椎大刀1点のほか、金環、銀環、玉類、須恵器が出土している。無窓の鐔を伴うこの金銅装頭椎大刀は6世紀第Ⅲ四半期頃のものと考えられている（野垣 2005）。呉羽山古墳に近接する番神山横穴墓群は後期後半に造墓が開始され、7世紀後葉まで存続する。つまり、呉羽山古墳と番神山横穴墓群は一時期並存しており、威信財的な頭椎大刀を有し、かつ墳丘を備えたであろう呉羽山古墳の下位に、番神山横穴墓の被葬者たちが從属するという関係が推測される（高橋 2007a）。井田川西岸の中位段丘には二本榎古墳がある。長径14.2m、短径13.8mの円墳で、長さ5.8mの左片袖式の横穴式石室をもつ。鉄刀子、ガラス小玉、須恵器が出土しており、築造時期は6世紀後半～7世紀前半に比定されている（富山市教育委員会 2012b）。

この他、呉羽丘陵には古代の須恵器窯が多数確認されている。7世紀～8世紀初頭には西金屋センガリ山窯跡がある。また、8世紀に最盛期をむかえる古沢1～5号窯跡などが存在する。古沢窯跡群で表採された須恵器は杯身と杯蓋、皿などの食膳具の比率が高いことが指摘されている（富山大学人文学部考古学研究室 1989）。古沢窯跡群に近接する古沢遺跡からは、8世紀後半の竪穴住居跡が確認されている（富山市教育委員会 1977）。

以上のように、杉谷丘陵から呉羽丘陵一帯にかけての地には数多くの遺跡や弥生墳墓、前方後円（方）墳を中心とした古墳が存在し、富山県における弥生時代から古墳時代への変遷を考える上で重要な地域の一つと考えられている。神通川より東には、比較的流れが緩やかで河川沿いに小平野が広がる白岩川流域に、20～46mの円墳群や、未発掘で実態不明の小規模な前方後円（方）墳が少数存在することを除いては、新潟県上越地方までの間に特筆される古墳は認められない。つまり、杉谷丘陵から呉羽丘陵一帯にかけての地は、日本海側における四隅突出

型墳丘墓の東限を示すだけでなく、前方後円（方）墳の東北日本海側への波及の一端を示す地域としてもきわめて重要と言える。

神通川支流の井田川、山田川、辺呂川流域を經營基盤として、それとともに神通川を介せば日本海や飛騨地方へ相互に通交できることが、この一帯の地域集団の安定や勢力の拡張に深く関係したものと推察される。

（小谷望有季・高橋浩二）

注

- （1）呉東、呉西という呼称は昭和初期頃から普及したらしく、富山藩政初期（寛永期）には神通川を境にして二分されることがあった（廣瀬 2003）。

参考文献

- 大野英子 2007『日本の遺跡18 王塚・千坊山遺跡群』同成社
岸本雅敏 1992『越中』『前方後円墳集成』中部編、山川出版社
高橋浩二 2005『北陸の前方後方墳の概要』『前方後方墳とその周辺』第11回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料、東北・関東前方後円墳研究会
高橋浩二 2006『北陸の前方後方墳—柳田布尾山古墳の時期的評価をめぐってー』『石川考古学研究会誌』第49号、石川考古学研究会
高橋浩二 2007a『富山の古墳—水見・雨晴の首長と日本海—』日本海学研究叢書、富山県・日本海学推進機構
高橋浩二 2007b『富山市古沢塚山古墳の再測量とその評価』『富山大学人文学部紀要』第47号
富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 2003『勅使塚・永代遺跡・安居窓群・中山遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 1974a『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』
富山市教育委員会 1974b『富山市境野新遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 1975『富山市杉谷（A・G・H）遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 1976『富山市杉谷遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 1977『富山市古沢遺跡概要調査報告書』
富山市教育委員会 1983『富山市古沢 A 遺跡発掘調査概要』
富山市教育委員会 1984『富山市呉羽山丘陵古墳分布調査報告書』
富山市教育委員会 2009『富山市富嶽遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2009『富山市百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2012a『富山市百塚遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2012b『富山市二本榎遺跡確認調査報告書』
富山大学人文学部考古学研究室 1989『越中上末窓』
富山大学人文学部考古学研究室 2012『杉谷6号墳-第1次発掘調査報告書-』
富山大学人文学部考古学研究室 2013『杉谷6号墳-第2次発掘調査報告書-』
野垣好史 2005『富山県の頭椎大刀』『ふくおかの飛鳥時代を考える』ふくおか歴史文化フォーラム資料集、福岡町教育委員会・富山考古学会編
廣瀬 誠 2003『神通川と呉羽丘陵—ふるさとの風土—』桂書房
婦中町教育委員会 2000『南部 I 遺跡発掘報告書』II
婦中町教育委員会 2002『富山県婦中町千坊山遺跡群試掘調査報告書』
婦中町教育委員会 2003『南部 I 遺跡発掘調査報告書』III
古川知明 1999『杉谷古墳群』『富山平野の出現期古墳』富山考古学会創立50周年記念シンポジウム、富山考古学会
古沢校下ふるさとづくり推進協議会 2009『海を越えての交流—杉谷4号墳と四隅突出墳—』

第3章 研究史

1. 富山市教育委員会による調査の成果

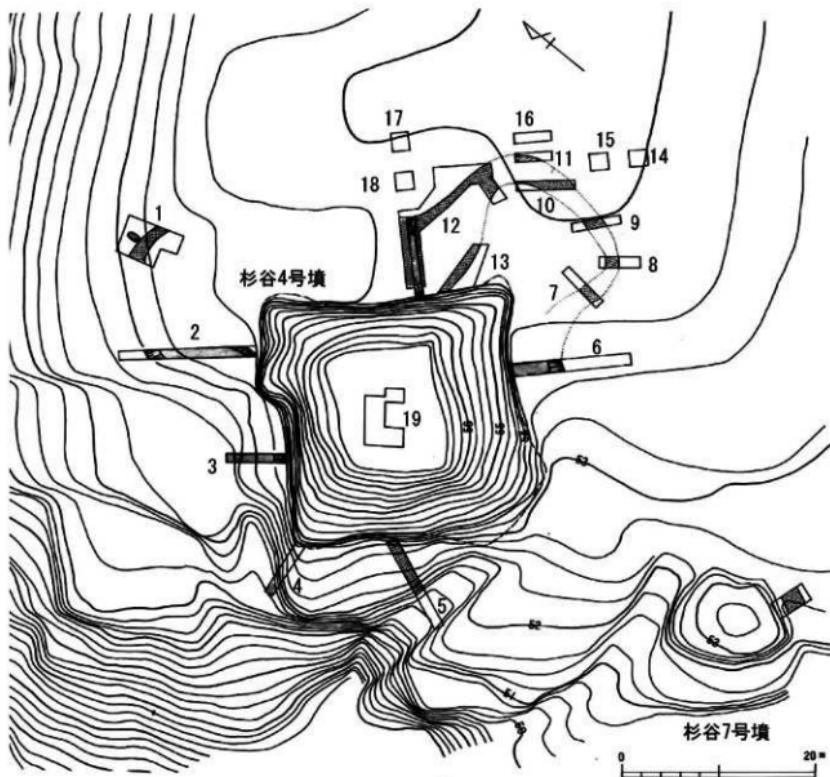
杉谷古墳群内の1番塚古墳と2番塚古墳、3番塚古墳、そして4号墳と5号墳、6号墳、7号墳については、富山市教育委員会によって1974（昭和49）年2～3月にかけて発掘調査が実施され、その概要が報告された（富山市教育委員会 1974）。また、杉谷A遺跡の周溝墓群については、1974（昭和50）年9月～翌年1月にかけて発掘調査が実施され、概要が報告された（富山市教育委員会 1975）。発掘調査は遺跡範囲と墳丘遺存状況の確認が主目的のトレンチ調査であったため、一部の遺構を除いてほとんどのトレンチは遺構面の検出に留められたが、さまざまな重要な知見がもたらされた。とりわけ、4号墳は調査当時、島根県以外で初めて発見された四隅突出型墳丘墓⁽¹⁾として全国的に注目を浴びた（富山市教育委員会 1974、藤田 1990）。

ここでは、富山市教育委員会が実施した4号墳の調査成果について、その概要をまとめる⁽²⁾。この調査では北側突出部に2箇所、西側突出部に1箇所、東側突出部に6箇所、東側突出部の外側に5箇所、東側突出部から北東側墳裾部にかけて1箇所、また北西側・南西側・南東側墳裾部および墳頂部にそれぞれ1箇所のトレンチが設定された（第5図）。なお、調査報告書には断面図が掲載された箇所についてはトレンチ名が記載されているが、それらを除くとトレンチ名が未記載のため、北側突出部を起点として反時計回りに便宜的に数字で名称をふった。

まず、現墳丘については「一辺が約25mの方形を基調」とし、「高さは3m余で全体に扁平な様相を示す」とされる。また、現墳丘の形状に関して「若干墳裾が内湾する」とし、このことを四隅突出型墳丘墓と考える根拠の一につき挙げている。第5図で、現墳丘の墳裾を表す一点破線や等高線をたどってみると、墳裾の内湾はとくに北東側・南東側において良好に観察されるようである。また、方形部の北側・東側稜線部裾がわずかに張り出す様相が見られる。一方、「北西部および南側コーナー部では後世の溝状加工等がありやや変形している」と指摘されるところおり、この箇所の墳裾部の等高線は大きく乱れている。この他、現墳丘については、「墳頂部は10～12mの平坦部を形成する」、「墳頂部直前で緩やかな段がみられる」との指摘がある。

第1トレンチは北側突出部の先端に設けられた長さ約4～6m、幅約4mのおよそL字形のトレンチである。突出部前面部を巡る幅の狭い溝が検出されている。また、突出部前面部のすぐ外側からは、「長径120cm、短径70cmの長円形状土壌」が検出されている。いずれも遺構面の検出に留められている。

第2トレンチは北側突出部の基部に設けられた長さ約14m、幅約1mのトレンチである。「幅11m、深さ1m20cm」の幅広の溝が、突出部側面を「外展」して巡る様相が確認されている。断面図（第6図）を見ると、周溝の断面形は底面が平らな逆台形を呈する。周溝内側斜面下部（墳裾部）は緩やかに立ち上がるようである。土層は、まず墳丘側からKb層とKa層が堆積し、その上部にIX層が周溝外側斜面に至るまで比較的厚く堆積する。この上部には、墳丘側からはIXb層が、また周溝外側からは幾つもの土層が細かく流れ込み堆積するとともに、周溝中央部はVIIb層とVII層によって覆われる。そして、これらの上部を広く覆うように炭化物を含んだVI層や、III層が堆積する。墳丘側には焼土を含んだIIa層などの土層が細かく堆積する。

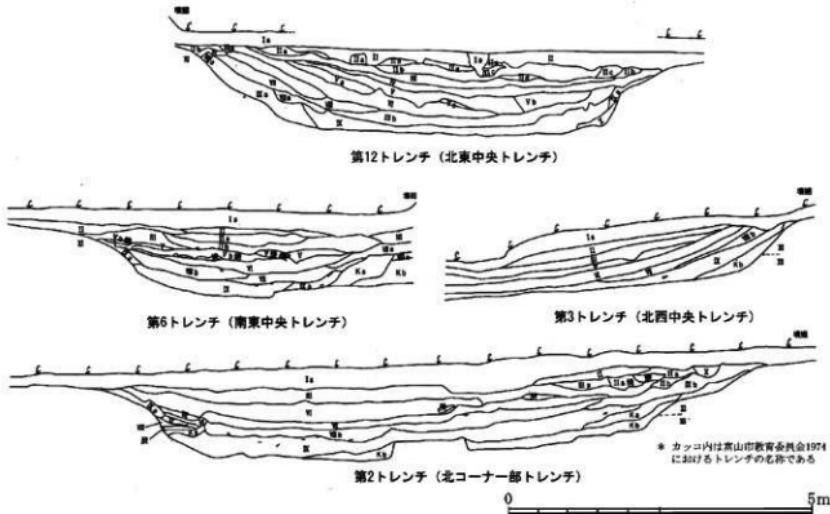


第5図 杉谷4号墳測量図及びトレーンチ配置図（縮尺1/500、富山市教育委員会1974に加筆）

第3トレーンチは北西側墳裾部に設けられた長さ約6m、幅約1mのトレーンチである。同じく幅の広い周溝が確認されているが、トレーンチが短いため、周溝外側斜面の状況は未詳である。周溝の断面形は底面が平らで、周溝中央部へ向かって緩やかに傾斜する。周溝内側斜面下半部（墳裾部）は比較的急傾斜で立ち上がるようである。土層は、まず墳裾部にKb層が流れ込み、その上にIX層が堆積する。この上部には、第2トレーンチとは異なり、VIIb層とVII層が墳丘側に堆積する。そして、これらの上部を覆ってVI層～II層が堆積する。溝の底面から高杯杯部が出土している（第7図-4）。

第4トレーンチは西側突出部の基部に設けられた長さ約6m、幅約1mのトレーンチである。トレーンチ西端の標高51,250m～51,500mの等高線の間には、周溝部と同じ網かけが表現されているが、これについての具体的な記述はなされていない。

第5トレーンチは南西側墳裾部に設けられた長さ約10m、幅約1mのトレーンチである。トレ



層位

I a	褐色耕作土	(柔かい)
II	黒褐色土	(ややしまりあり・黄色粒子若干含む)
IIa	"	(IIaよりやや柔かい)
IIb	"	(IIbよりやや柔系)
IIc	"	(黒系・柔かい)
III	褐色土	(黄色粒子少しもぶり状に多く含む)
IIIa	"	(IIIより黒系・柔かい)
IV	褐色土	(黄色粒子若干含む・しまり最強)
V	黒褐色土	(黄色粒子若干含む・柔かい)
Va	"	(Vより柔かく黒系)
Vb	"	(細粒子・しまりあり・褐色系)
VI	黑色土	(地山粒子をしもふり混入・炭化物含・柔かくバサバサ)
VII	黄褐色土	(地山粒子をしもふり混入・粘性強くしまりあり)
VIIa	"	(VIIよりしまりあり)
VIIb	"	(黒系・細密)
VIII	褐色土	(スコリア状地山粒子多く含む・柔かくバサバサ)
VIIIa	"	(VIII中最も黒系)
VIIIb	"	(ややしまりあり・黒系)
IX	黑色土	(炭化物・スコリア状地山粒子多く含む・柔かくバサバサ)
IXa	"	(やや褐色系)
IXb	"	(IXaより細密)
X	黄褐色土	(地山再堆積・柔かくバサバサ)
Xa	"	(スコリア状地山粒子混入)
XI	黄褐色	
地山土		
XII	黄色シルト	
基盤		
Ka	黒褐色土	(黄色スコリア・炭化物を最も多く含み柔かくバサバサ)
Kb	"	(Kaより褐色系・黄色スコリアを多く含む)
焼土		
焼炭化物		

(数字にアルファベットつくものは全て亜種で、註記は基本層を基準にする)

第6図 杉谷4号墳トレンチ断面図 (縮尺1/80、富山市教育委員会1974に加筆)

チ北半部の標高 51.500m～52.500m の等高線の間には、やはり周溝部と同じ網かけが表現されているが、これについても具体的な記述はなされていない。トレンチ南半部には南側突出部へ向けて続く「後世の溝状加工」が及んでいる。

第 6 トレンチ⁽⁹⁾ は南東側墳裾部に設けられた長さ約 12m、幅約 1m のトレンチである。「幅 5 m、深さ 1m10 cm」の幅の広い周溝が確認されている。周溝の断面形は底面が平らである。周溝外側斜面下半部は緩やかに立ち上がるようである。土層は、周溝中央部側から周溝内側斜面下半部にかけて Kb 層や Ka 層などが堆積し、周溝外側斜面側には IX 層や IXa 層、 VIIb 層などが流れ込んで堆積する。この上面から中層までは VI 層が広く覆う。この上部には焼土を含んだ V 層や Vb 層が堆積する。報告書では「中層に焼土層が存在し、平安時代須恵器がこれを中心に上下の層より出土した」ことが報告されている。上層には同様に III 層と II 層が見られる。

第 7～11 トレンチは東側突出部の側面から前面部に設けられた長さ約 4～6m、幅約 1m のトレンチである。北側突出部と同様に、突出部前面部を巡る幅の狭い溝が検出されている。調査の結果、東側突出部は現況の「墳丘コーナーより約 12m 突出」することが確認された。なお、周溝の掘削は行われておらず、遺構面の検出に留められている。

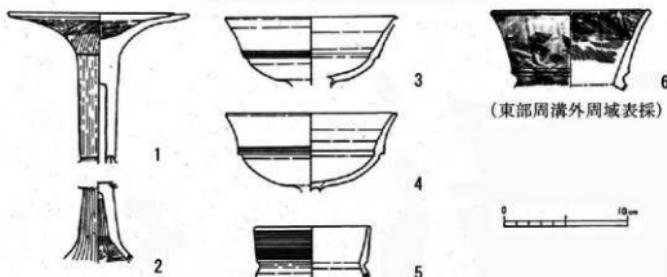
第 12 トレンチは東側突出部隅角部の箇所と北東側墳裾部の箇所（長さ約 9m、幅約 1.8m）とが連結されたトレンチである。突出部隅角部から北東側墳裾部にかけて徐々に幅が広がって巡る溝が検出されている。北東側墳裾部の箇所にはサブトレンチが設けられ、周溝が「幅 7m50 cm、深さ 1m30 cm」であることが確認された。周溝の断面形は底面が平らな逆台形を呈する。周溝斜面は、墳丘側は緩やかにカーブして立ち上がるが、反対側は立ち上がりが急傾斜となるようである。土層は、まず墳丘側から IXa 層が、また周溝外側から X 層と IXa 層が流れ込んだ後、その間に IX 層と IIIb 層が堆積する。第 2・3・6 トレンチと異なり、周溝の底面には Ka 層や Kb 層は見られない。IX 層・IIIb 層の上には、墳丘側から VII 層や VII 層、 VI 層、 Va 層、 V 層が堆積する。この上部には周溝中央部から周溝外壁にかけて IV 層と III 層などが見られ、最上層には II 層が堆積する。

第 13 トレンチは東側突出部の基部に設けられた長さ約 4.5～5m、上辺幅約 1.5m、下辺幅約 5.5m の台形のトレンチである。突出部先端へ向けて周溝が外反して広がる様子が検出されている。周溝の掘削は行われておらず、遺構面の検出に留められている。

第 14～18 トレンチは東側突出部の外側に設けられたトレンチである。第 14・15・17・18 トレンチは一辺約 1.8m、第 16 トレンチは長さ約 4m、幅約 1m である。いずれも遺構等に関する具体的な記述は見られない。

第 19 トレンチは墳頂部の中央部に設けられた長さ約 5～6m、幅約 4m のおよそコ字形のトレンチである。約 20 cm の表土を除去すると、「地山土や黒色土の斑文をもつ盛土」が検出された。また、この面において、トレンチのほぼ中央から「長さ 260 cm × 130 cm の長楕円形」の掘形が検出された。掘形の上面には「特に 25 cm 大の標示石（？）とも思われる礫」が 1 点見られ、それを中心にして高杯脚部、高杯杯部、そして壺または甌の口縁部から頸部など 4 点の土器が出土した（第 7 図-1～3・5）。掘形は「便宜的なものだが、他に比べやや黒ずんでおり」、また「土器の出土や標示石の存在から土壤ともみれる」と説明されている。

上記のように、富山市教育委員会の調査によって北側・東側突出部と周溝、および北西側・



第7図 杉谷4号墳出土土器（縮尺1/4、富山市教育委員会1974）

南東側・北東側埴裾部における周溝の存在が確認された結果、「北東部での周溝を含めた一辺の長さは47~48mを測る」四隅突出型埴丘墓であることが明らかにされた。突出部の形状と規模に関しては、東側突出部は第5図の周溝上端を表す復元ライン（点線）でみると、基部から先端部にかけて外反しながら大きく広がる撥形の形状を呈し、現埴裾からの長さは約10.5mで、先端部のもっとも広がった箇所の幅は約13.5mとなる（筆者測）。また、突出部前面部では周溝の幅が狭くなるが、溝は途切れずに巡っていることが明らかにされた。同様に、北側突出部でも前面部には幅の狭い溝が巡ることが指摘されている。なお、突出部前面部の様相から、周溝は「1m20cm前後、深さ70cm余で四周連係するものと思われる」と記述されているが、南側突出部の箇所については、トレンチは入れられておらず、未解明である。この他、埴丘に関しては、「貼石は存在しない」ということが指摘されている。

築造時期に関しては、出土土器は「大局的には北陸土師器第1様式（吉岡1967）に比定」されるものであり、また当時島根県下でのみ発見されていた四隅突出型埴丘墓が「古墳時代初期の在地型古墳の典型として把握されている（前島1972・東森1973）」ことからも、「時期的にも同種のものとできる」と結論づけられた。北陸土師器第1様式は、その後の研究で石川県加賀における月影式と並行すること（橋本1975）、そして月影式は月影I式とII式とに区分されること（谷内尾1983）、さらに月影II式の新しい段階は外来系土器が流入しはじめる白江式に分離されることが明らかにされた（田嶋1986）。月影式は畿内の庄内式に並行し、弥生時代終末期の土器とする研究者が多いが、白江式は庄内式後半期に比定され、古墳時代初頭の土器と評価する研究者も見られる。したがって、杉谷4号墳に関しては弥生時代終末期に築かれた四隅突出型埴丘墓とする考え方と、古墳時代初頭まで残存する四隅突出形の古墳とする考え方がある⁽⁴⁾。

以上のように、杉谷4号墳は島根県とその周辺に特徴的な四隅突出型埴丘墓であり、それとともに同時期に比定される杉谷A遺跡の各周溝墓と比べて格段に大型であることが明らかにされた。しかしながら、東側突出部は撥形に大きく広がる平面形が検出されたものの遺構検出面での確認に留まるものであり、埴裾における規模や形状などが明らかにされたわけではない。同じく北側突出部についても部分的な確認に留まる。南側・西側の突出部については、その存

否すら明らかではない。墳裾を基準とした墳丘規模や墳丘盛土構造、また周溝が全周するのかなどについても未詳である。さらに、墳頂部等から出土した土器は少数で、完形に復元できる個体もなく、確実な築造時期を判断するまでには至っていない。したがって、突出部の規模や形態、また墳丘規模や盛土構造、周溝の様相等についてさらなる解明を目指すとともに、築造時期を絞り込む資料を得ることが最重要の課題と言えるだろう。そしてこれらの成果を踏まえて、北陸への四隅突出型墳丘墓の伝播過程や、富山平野における弥生墳丘墓から古墳への変遷過程を再検討することが求められている。⁽⁵⁾

(高橋浩二)

注

- (1) 富山市教育委員会 1974 では、「四隅突出形古墳」と表記されている。
- (2) 杉谷古墳群内の他の古墳及び杉谷 A 遺跡の調査成果は、高橋 2012 でふれていますので参照されたい。
- (3) 調査報告書では断面図に「南西中央トレンチ」と書かれているが、これは「南東中央トレンチ」の誤りであり、また断面図の表土上にある「墳裾」の表記も本来は右端に書かれるべきものであることを、富山市教育委員会を通じて調査担当者の藤田富士夫氏からご教示いただいた。これらを修正した上で第 6 図を掲載した。記して感謝申し上げます。
- (4) 調査担当者の藤田氏は、杉谷 4 号墳を古墳時代の古墳と位置付けている。
- (5) 杉谷 4 号墳については、以前にその評価を述べたことがあるので参照されたい（高橋 2009）。

参考文献

- 高橋浩二 2009 「北陸における弥生墓制」『中部の弥生時代研究』中部の弥生時代研究刊行委員会
高橋浩二 2012 「研究史」『杉谷 6 号墳－第 1 次発掘調査報告書－』富山大学人文学部考古学研究室
田嶋明人 1986 「考察－漆町遺跡出土土器の編年的考察－」『漆町遺跡』I、石川県立埋蔵文化財センター
富山市教育委員会 1974 『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』
富山市教育委員会 1975 『富山市杉谷(A・G・H)遺跡発掘調査報告書』
藤田富士夫 1990 『古代の日本海文化』中公新書
橋本澄夫 1975 「弥生土器－中部 北陸 4－」『考古学ジャーナル』No.111、ニュー・サイエンス社
谷内尾晋司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』
吉岡康暢 1967 「北陸における土師器の編年」『考古学ジャーナル』No.6、ニュー・サイエンス社

2. 北陸における四隅突出型墳丘墓の調査・研究史

杉谷4号墳の調査から15年経過した1989年に、約4.5km南西の富山市富崎城跡鐘搗堂地区において四隅突出型墳丘墓（富崎1号墓）が発見され、発掘が実施された。また、同年には石川県白山市一塚遺跡、1992年には福井市小羽山墳墓群が発掘され、加賀や越前でも四隅突出型墳丘墓の類例が知られるようになった。杉谷4号墳の調査段階では山陰地方から遠く離れた類例に対する懐疑的な意見もあったようだが（藤田1990）、発掘の進展とともに杉谷4号墳の例が決して孤立した存在ではないことが明らかにされていった。その後は、1998年から福井市高柳遺跡、1999年に富山市六治古塚、2000年に富崎墳墓群と鏡坂墳墓群の発掘が行われた。

北陸における四隅突出型墳丘墓の数について、古川登は福井県に8基、石川県に1基、富山県に3基の合計12基^⑩とする（古川2010）。大野英子は福井県に8基、石川県に1基、富山県に7基の合計16基としている（大野2007）。他に、未発掘だが測量調査から類推されるものとして、富山市呉羽山丘陵No.6・No.10・No.18古墳などがある^⑪。

各遺跡から発見・調査された四隅突出型墳丘墓の概略は次の通りである。（高橋浩二）

（1）北陸における四隅突出型墳丘墓の調査史

① 小羽山墳墓群（福井県福井市清水町、小羽山墳墓群研究会編2010）

九頭竜川水系の日野川支流である志津川溪口部南岸の小羽山丘陵に立地する（標高約26～61m）。確認された弥生時代の墳墓40基のうち、7基が四隅突出型墳丘墓である。

22号墓は方形部の残存高0.9m、長さ8.2m、幅6.1mで長方形を呈し、四隅が短く舌状に突出する。突出部を含む規模は8.9m×8.7mを測るとされる。墳丘下半部は地山削り出しで構築されている。墳丘上半部は失われている。方形部北側のテラス覆土中から甕が出土している。築造時期は弥生時代後期末から終末期初頭に位置づけられている。

23号墓は方形部の残存高0.9m、長さ8.6m、幅6.5mで長方形を呈し、四隅が短く舌状に突出する。突出部を含む規模は11m×9.2mを測るとされる。墳丘下半部は地山削り出しで構築されている。墳丘上半部は失われている。墳頂部には長さ2.25m、幅2.03m、深さ0.49mの墓壙が存在し、長さ1.7m、幅0.5mの組合式箱形木棺の痕跡が検出されている。棺内から鉄製刀子1点が出土している。また、墓壙上と墳裾から無頬壺や広口壺、高杯が出土している。築造時期は弥生時代後期末から終末期初頭に位置づけられている。

24号墓は方形部の残存高1.9m、長さ13.2m、幅12.4mでほぼ正方形を呈し、四隅が比較的長く舌状に突出する。突出部を含む規模は19.5m×18m前後に復元できるとされる。墳丘下半部は地山削り出しで構築されている。墳丘上半部は失われている。墳頂部から埋葬施設が2基検出されている。第1埋葬（墓壙：2.8m×1.4m、木棺：1.88m×0.73m）、第2埋葬（墓壙：2.73m×1.73m、木棺：1.76m×0.64m）ともに組合式箱形木棺を内蔵する。前者から10点、後者から40点の、ともに碧玉製管玉が出土している。また、墓壙上面や墳裾部から広口壺、高杯、器台、鉢などが出土している。築造時期は弥生時代終末期初頭に位置づけられている。

26号墓は3つの尾根が合流する所に築かれている。北側突出部は削平されている。方形部は長さ27m、短軸20.5mを測り、長方形を呈する。突出部は比較的残りがよい西側で、長さ9.5m、基部幅7m、先端部幅11～13mを測る。西側突出部は先端部が撥形に開く平面形を呈する。

突出部を含む規模は42.5m×34mである。突出部墳裾から現墳丘までの高さは最大4.4mを測る。墳丘下半部は地山削り出し築成、墳丘上部は盛土築成である。墳頂部から埋葬施設が6基検出されている。墳頂部中央の第1埋葬は長さ6.5m、幅3.4m、深さ約1mのとりわけ大きな2段墓壙で、そこに長さ2.25m、幅0.5～0.7mの組合式箱形木棺が置かれる。木棺底面に微量の赤色顔料が残る。墓壙上面から脚付無頸壺や広口壺、高杯、器台、鉢などの約70個体の供獻土器、碧玉製管玉1点が出土した他は、副葬品を欠く。他は第2埋葬（箱形木棺1.15m）、第3埋葬（例抜式木棺、鉄鏃2点）、第4埋葬（箱形木棺2.15m、碧玉製管玉13点）を除いて、第5埋葬（箱形木棺1.8m、翡翠製勾玉1点・赤色顔料）、第6埋葬（箱形木棺約1.4m）である。築造時期は弥生時代後期末に位置付けられている。

30号墓は小羽山丘陵主脈から一段下がった最も幅の広い尾根に築かれる。北側突出部は神社造営で削平されている。方形部は長さ26.2m、幅21.8mを測り、長方形を呈する。突出部は相対的に規模の大きい東側で、長さ4.8m、基部幅5.5m、先端部幅6.6mを測る。突出部は幅広の短い舌状の平面形を呈する。突出部を含む規模は33.2m×26.8mである。突出部墳裾から現墳丘までの高さは最大3.85mを測る。墳丘下半部は地山削り出し築成、墳丘上半部は盛土築成である。墳頂部中央には長さ5.18m、幅3.07m、深さ1.09mの墓壙が存在し、長さ約3.6m、幅約1mの組合式箱形木棺の痕跡が検出されている。棺内から鉄製短剣1点、碧玉製管玉103点、ガラス製管玉10点、ガラス製勾玉1点が出土したほか、赤色顔料が検出されている。また、墓壙上面から杵形石器1点とガラス製管玉1点が出土したほか、墓壙上面や墳丘から脚付無頸壺や細頸長頸壺、高杯、器台、鉢などの供獻土器や甕が多数出土している。築造時期は弥生時代後期後葉に位置づけられ、北陸で最初の四隅突出型墳丘墓と考えられている。

33号墓は神社造営で北半部が削平されている。方形部は残存箇所で東西7m、南北3m、残存高0.95mを測る。墳丘下半部は地山削り出しで構築される。墳丘上半部は失われている。墳頂部から長さ1.36m、最大幅0.62mの舟形木棺と考えられる痕跡が検出されている。棺内から翡翠製勾玉1点が出土した。また、墳裾部から有段口縁壺が出土している。築造時期は弥生時代後期末から終末期前葉に位置づけられている。

47号墓は方形部の長さ6.5m、幅4.3mで、残存高0.7mを測る。突出部を含む規模は8m×7.6mを測るとされる。墳丘下半部は地山削り出しで構築されている。墳丘上半部は失われている。築造時期は弥生時代後期末から終末期初頭に位置づけられている。

② 高柳遺跡 ST-B02（福井県福井市高柳町、福井市教育委員会 2011）

九頭竜川南岸の福井平野北端部に立地する（標高9m）。隣接して方形周溝墓が7基存在する。

ST-B02は南側突出部先端部を除く箇所が調査されている。墳裾部から上は削平されて現存しない。方形部は南北6.5m、東西6.1mを測り、ほぼ正方形を呈する。突出部は長さ約2mで、報告書の図から筆者が計測すると基部幅約2m、最大幅約2.1mを測る。方形部の西側から南側にかけては突出部を含めて墳裾部に溝が存在するが、南側突出部の先端部にだけは溝は巡っておらず、墳丘への出入口の可能性が考えられている。周溝は、方形部側は最大幅約2.2m、深さ約0.3mで、突出部前面部側は幅約0.4～0.8mを測る（いざれも筆者測）。周溝内から甕が出土している。

③ 一塚遺跡 SX21（石川県白山市一塚町、石川県松任市教育委員会 1995）

手取扇状地扇端部の、標高 8m の微高地に立地する。同時期には四隅突出型墳丘墓の SX21 を取り巻いて、方形周溝墓約 10 基と土壙墓が築かれている。

SX21 は南側突出部を除く箇所が調査されている。墳裾部から上は削平され現存しない。方形部は長さ 16.8m、幅 14.6m を測り、やや長方形を呈する。突出部は、その全容が判明する北側突出部は長さ 6.8m で、報告書の図から筆者が計測したところ基部幅約 5m、最大幅約 6.2m を測る¹³⁾。突出部は先端部が楔形に開く平面形を呈する。墳丘には周溝が存在し、突出部も含めて全周するという。周溝は、方形部側は最大幅約 5.5m、深さ約 1m で、突出部側は幅約 0.5m、深さ約 0.3m を測る（いずれも筆者測）。墳裾部は周溝によって構築されている。周溝外側の傾斜面から装飾器台や装飾壺のほか、甕、壺、高杯、器台、鉢が出土している。築造時期は弥生時代終末期に位置づけられている。

④ 富崎墳墓群（富山県富山市婦中町、婦中町教育委員会 2002）

3 基の四隅突出型墳丘墓で構成される。山田川南岸の富崎丘陵北東端部（1 号墓、2 号墓）、および富崎丘陵北東端から北へ派生した尾根の基部（3 号墓）に立地する。

1 号墓は 3 基の中で最も高い標高 70m の箇所に築かれている。方形部は一边約 21.7m の正方形を呈する。突出部は長さ約 6m で、基部幅約 6m、最大幅約 9m を測るとされる。突出部は長さの割に幅が膨らんだ楕円形の平面形を呈するとされる。墳丘には周溝が存在し、突出部も含めて全周するという。周溝は、方形部側は最大幅 7.5m、深さ 1.1m で、突出部側は最大幅約 1.5m、深さ約 0.22m を測る。墳裾部は周溝によって構築されている。現墳丘の部分は盛土築成である。現墳丘の高さは最大 3m を測る。墳丘に確実に伴う遺物は未出土だが、牧場建設で遺跡内が造成された際に、1・2 号墓の周辺から台付装飾壺などが採集されている。築造時期は弥生時代後期後半から終末期に位置づけられている。

2 号墓は 1 号墓の北東側に隣接して築かれている。墳丘の北側は崖面で、東側は牧場造営で失われている。方形部は東西 17m 以上、南北 15m 以上を測る。現墳丘の高さは最大 2.8m を測る。突出部は南西側のみ調査されており、長さ 6.3m で、基部幅 6m、最大幅 9.5m を測るとされる。突出部の平面形は同じく長さの割に幅が膨らんだ楕円形を呈するとされる。南西側突出部の前面部には周溝が巡る。周溝はここから方形部南側にかけて確認されている。周溝は、方形部南側は最大幅 6m、深さ 1.5m、南西側突出部は最大幅 2m、深さ 0.22m を測る。墳裾部は周溝によって構築されている。現墳丘の部分は盛土築成である。周溝から器台脚部が出土している。築造時期は弥生時代後期後半から終末期に位置づけられている。

3 号墓は 1・2 号墓から約 170m 南東へ離れた標高 67.5m の箇所に築かれている。方形部は長さ 22m、幅 21m を測り、ほぼ正方形を呈する。現墳丘の高さは最大 3.9m を測る。突出部は南東側を除く 3 方向が調査されており、長さ 4m 以上、平均で基部幅 6.2m、最大幅（上端）は 12m 程度を測るとされる。方形部の北側および南側には墳裾部に最大幅 6.2m、深さ 0.9m の溝が存在する。だが、各突出部には溝は巡っておらず、報告書で大野は「四隅掘り残しタイプの四隅突出型墳丘墓」としている。一方、古川は「周溝区画型墳丘墓」として四隅突出型墳丘墓には含めない¹⁴⁾。墳丘の上半部は盛土築成である。墳丘裾部や南西側突出部周辺の土坑から土

器が出土している。この他、墳丘盛土内からも多数の土器片が出土している。土器には甕、壺、高杯、器台、鉢、蓋のほか、勾玉形の文様を施した赤彩の有段口縁装飾壺がある。築造時期は弥生時代後期後半に位置づけられている。出土土器は富崎1・2号墓よりも若干古く編年され、県内では最も古い四隅突出型墳丘墓と考えられている。

⑤ 六治古塚（富山県富山市婦中町、婦中町教育委員会 2002）

山田川の支流である辺呂川北岸の河岸段丘南端部に立地する。標高は 57m である。北側突出部から東側突出部にかけては崖面で失われている。方形部は一辺約 24.5m を測り、ほぼ方形を呈すると推測されるという。現墳丘の高さは最大 5.1m を測る。突出部は東側を除く 3 方向が調査されており、平均で長さ 7.2m、基部幅推定 6.7m、最大幅推定 10.6m を測るとされる。突出部の平面形は長さの割に幅が膨らんだ楕円形を呈するとされる。墳丘の北半部には墳裾部から溝が検出されている。その規模は、方形部側は最大幅 10.5m、深さ 1.1m で、突出部側は最大幅 4.1m、深さ 0.3m を測る。南側突出部には溝は巡らず、地山削り出しで構築されている。古川は「周溝区画型墳丘墓」として四隅突出型墳丘墓には含めない。墳丘の上半部は盛土築成である。墳頂部の中央からは幅 1.3m で、長さ 2.9m 以上の埋葬施設とみられる掘形が検出されているが未発掘である。この掘形の上部や周溝などから、甕、壺、高杯、器台、蓋が出土している。築造時期は弥生時代終末期に位置づけられている。なお、約 100m 北側には、前方後方形周溝墓の向野塚が後続して築かれている。

⑥ 鏡坂墳墓群（富山県富山市婦中町、婦中町教育委員会 2002）

2 基の四隅突出型墳丘墓で構成される。山田川北岸の河岸段丘南端部に立地する。

1 号墓は標高 63m の所に築かれている。墳丘の東側は崖面および神社造営で失われている。方形部は一辺約 24.1m を測り、ほぼ方形を呈すると推測されるという。現墳丘の高さは最大 4.8m を測る。突出部は北西側と南西側の 2 方向が調査されており、長さ 4m 以上、基部幅 7m、最大幅（上端）12m を測るとされる。方形部の北側・西側・南側には墳裾部に最大幅 8m、深さ 1.55m の溝が存在する。だが、北西側・南西側突出部には溝は巡っておらず、報告書で大野は「四隅掘り残しタイプの四隅突出型墳丘墓」としている。一方、古川は「周溝区画型墳丘墓」として四隅突出型墳丘墓には含めない。墳丘の上半部は盛土築成である。墳裾部や周溝から甕、壺、高杯、器台、鉢が出土している。築造時期は弥生時代終末期に位置づけられている。

2 号墓は 1 号墓から約 150m 離れた標高 57m の所に築かれている。墳丘の南東側は崖面で失われている。方形部は一辺約 13.7m を測り、ほぼ方形を呈すると推測されるという。現墳丘の高さは最大 3m を測る。突出部は北側と西側の 2 方向が調査されており、平均で長さ 3.75m、基部幅 4.1m、最大幅 6m を測るとされる。突出部の平面形は長さの割に幅が若干膨らんだ楕円形を呈するとされる。崖に面する墳丘南東側を除き、方形部の墳裾部には最大幅 4.4m、深さ 0.93m の溝が存在する。また、西側突出部には最大幅 1.3m、深さ 0.5m の溝が巡る。北側突出部の前面部は未調査である。報告書では「周溝を全周させて」としているが、崖に面する墳丘南東側にはトレンチは入れられておらず、周溝が全周するかどうか未解明である。古川は「周溝区画型墳丘墓」として四隅突出型墳丘墓には含めていない。墳丘の上半部は盛土築成である。

墳裾部の溝から壺、高杯、器台、鉢、蓋が出土している。築造時期は弥生時代終末期に位置づけられている。

⑦ 吾羽山丘陵№6、№10、№18 古墳（富山県富山市、富山市教育委員会 1984）

杉谷 4 号墳から約 1.5～2.2 km 北東の、吾羽山丘陵南東端に沿ってある吾羽山丘陵古墳群内に築かれている。

№6 古墳は標高約 79m の所に築かれている。現墳丘は一辺約 19m で、高さは約 2.7～4.5m を測る。墳丘の各辺が内湾し、また西・東・南側の三隅に突出する様相が見られるため、四隅突出型墳丘墓の可能性が指摘されている。

№10 古墳は標高約 94.5m の所に築かれている。現墳丘は長辺 23.5m、短辺 22m で、高さは約 3～5.21m を測る。

№18 古墳は標高約 85m の所に築かれている。現墳丘は長辺約 25m、短辺約 23m で、高さは約 3～3.65m を測る。東側隅角の箇所はやや弱いものの、四隅に突出する様相が見られる。

（高橋浩二）

注

- (1) ただし、古川は杉谷 4 号墳について、「出土土器が畿内の庄内 3 式～布留 0 式に並行することから古墳時代前期初頭の古墳であるため除外する」として、弥生時代の類例には含めていない。
- (2) 吾羽山丘陵№6・№10・№18 古墳は 1984 年に測量調査が行われた。他に、小矢部市北一 1 号墓、高岡市東海老板ダイラ 2 号墳、同市鳥越 A3 号墳について四隅突出型墳丘墓の可能性が指摘されている（西井 1999）。
- (3) 墳裾（周溝内側斜面下端）を基準に計測した値。
- (4) 古川 2010 による。

参考文献

- 石川県松任市教育委員会 1995『旭遺跡群』I
大野英子 2007『日本の遺跡 18 王塚・千坊山遺跡群』同成社
小羽山墳墓群研究会編 2010『小羽山墳墓群の研究』
富山市教育委員会 1984『富山市吾羽山丘陵古墳分布調査報告書』
西井龍儀 1999「北一墳墓群」「東海老板ダイラ古墳群」「鳥越古墳群」「富山平野の出現期古墳」富山考古学会創立 50 周年記念シンポジウム、富山考古学会
福井市教育委員会 2011『高柳遺跡発掘調査報告書』
藤田富士夫 1990『古代の日本海文化』中公新書
婦中町教育委員会 2002『富山県婦中町千坊山遺跡群試掘調査報告書』
古川 登 2010「首長墓、登場一小羽山 30 号墓造営の歴史的意味－『小羽山墳墓群の研究－研究編－』小羽山墳墓群研究会編

(2) 北陸における四隅突出型墳丘墓の研究史

北陸における四隅突出型墳丘墓に関する研究は、1974年の杉谷4号墳の発見によってはじまりました。当時、四隅突出型墳丘墓は島根県でのみ確認されていた墳丘形態であり、調査担当者の藤田富士夫は杉谷4号墳が島根県の四隅突出型墳丘墓に比べて倍近い規模をもつことや貼石が存在しないことを除けば、時期的にも同種の墳墓であると指摘した（富山市教育委員会 1974）。そしてこれを踏まえて、墳丘の造成方法や貼石の有無という相違点があるものの、北陸と山陰との結びつきを示すものとし（藤田 1975）、首長墓制が同じ型式であるのは単なる人々の往来だけでなく、首長を介した地域間の交流があったこと、また「越」と「出雲」との中間に四隅突出型墳丘墓が見られないのは日本海ルートによる直接交流があったことを主張した（藤田 1990）。さらに、杉谷型四隅突出墳（杉谷4号墳・富崎1号墳・六治古塚）は、山陰からの系譜を「カタチ」で表すとともに、王墓のあり方を大和や東海から受け入れて、どの勢力にも属さない固有の墳墓形態を創生したことを主張した（藤田 1999）。

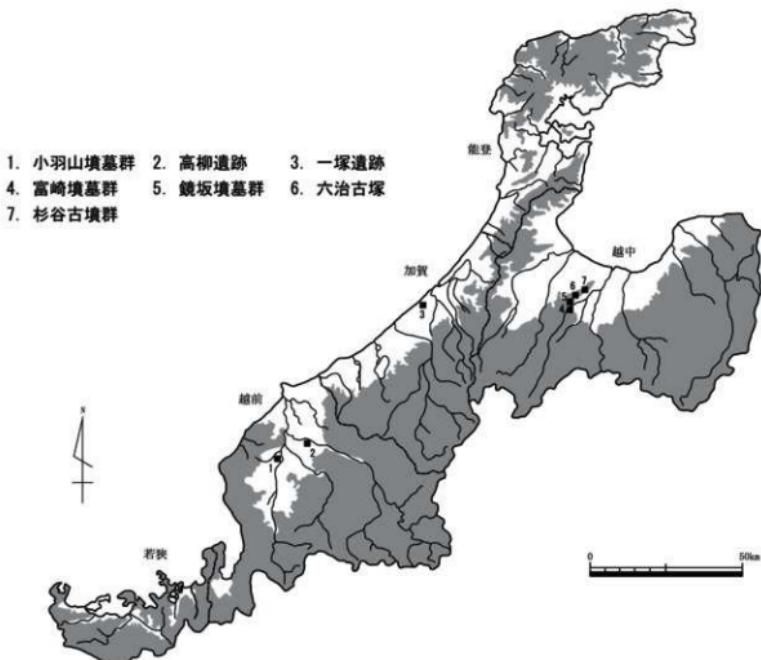
次に、古川登は福井県小羽山30号墓の調査を通して、小羽山30号墓は北陸において最も山陰的な四隅突出型墳丘墓であるとした（古川 1992）。そして、1989年から1992年にかけて発見された富山県富崎1号墓、石川県一塚遺跡SX21、小羽山30号墓の例を踏まえて、北陸の四隅突出型墳丘墓には貼石・列石が存在しないこと、また小羽山30号墓、一塚遺跡SX21、富崎1号墓、杉谷4号墳へと突出部が長大化する型式変化が順次おえることから「北陸型四隅突出型墳丘墓」を提唱した（古川 1993）。北陸の四隅突出型墳丘墓は、北陸と山陰の墓制が融合したものであること、また山陰の影響を直接受けたのは小羽山墳墓群のみであり、石川・富山の四隅突出型墳丘墓は小羽山墳墓群から二次的に伝播したことを主張した（古川 1994）。

これに対して、前田清彦は一塚遺跡SX21の立地やそこで行われた土器祭祀などから、北陸の四隅突出型墳丘墓は在地の埋葬習俗を基盤にしていることを指摘したうえで、四隅突出型墳丘墓の伝播に関しては、北陸各地の首長が山陰の首長と順次関係を結んだ結果と捉え、古川と異なる見解を示した（前田 1995）。そして、四隅突出型墳丘墓の造営は「イズモ」との系譜または友好同盟関係を示すため、「コシ」の各地域の人々が行ったことを主張した（前田 2007）。

また、富崎墳墓群や鏡坂墳墓群、六治古塚で調査された四隅突出型墳丘墓の例を踏まえて、大野英子は福井県小羽山墳墓群では山陰の四隅突出型墳丘墓の影響が強く見られるが、富山県では山陰の影響を受けつつも在地的様相を強く保持していることを主張した（大野 2002）。そして、島根県宮山4号墓などの四隅突出型墳丘墓の突出部も同じく撥形に肥厚・伸長していることや、富崎墳墓群や鏡坂墳墓群、六治古塚、杉谷古墳群が属する富山県婦負地域と山陰とでは四隅突出型墳丘墓の築造停止時期が一致するなどの共通点から、墳墓に関する交流があったことを主張した（大野 2007）。

以上のように、四隅突出型墳丘墓の伝播に関しては大きく分けて、山陰の影響を受けた福井県小羽山墳墓群から北陸の各地域に伝わったとする説と、北陸の各地域が山陰と直接交流したとする説の2つがみられる。突出部の形状が伝播過程や時期に関係しているため、今回の調査において杉谷4号墳の突出部の形状や周溝を明らかにすることは重要である。

（清水俊輝・山場愛弓）



第8図 北陸における四隅突出型墳丘墓の分布

参考文献

- 大野英子 2002 「四隅突出型墳丘墓の地域性」『千坊山遺跡群試掘調査報告書』婦中町教育委員会
- 大野英子 2007 『日本の遺跡18 王塚・千坊山遺跡群』同成社
- 富山市教育委員会 1974 『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』
- 藤田富士夫 1975 『富山県における古墳発生期の調査と成果』『古代学研究』第76号、古代学研究会
- 藤田富士夫 1990 『古代の日本海文化』中公新書
- 藤田富士夫 1999 「富山県における四隅突出墳出現の系譜について」『富山平野の出現期古墳』富山考古学会創立50周年記念シンポジウム、富山考古学会
- 古川 登 1992 「弥生後期の四隅突出型墳丘墓—福井県小羽山古墳群—」『季刊考古学』第41号、雄山閣
- 古川 登 1993 「北陸地方の四隅突出型墳丘墓について」『島根考古学会誌』第10集、島根考古学会
- 古川 登 1994 「北陸型四隅突出型墳丘墓について」『大境』第16号、富山考古学会
- 前田清彦 1995 「考察」『旭遺跡群』III、石川県松任市教育委員会
- 前田清彦 2007 「コシの四隅突出型墳丘墓」『金大考古』57、金沢大学考古学会

第4章 発掘調査の成果

1. 基準点と調査区の設定

杉谷4号墳については、平成23年度に学長裁量経費の交付を受けて、株式会社共和（和歌山市）に依託し、平面直角座標系第VII系（世界測地系）による測量基準点の設置、ならびに4号墳および7号墳を含む周辺現況地形の3D測量を実施した。

設置した基準点は、第2表および第9図のとおりである。3級基準点3-1、3-2は、4号墳東側の駐車場ガードレールのコンクリート基礎内に設置し、4級基準点4-1～4は墳丘周間に、4-5・6は墳丘上に設けた（第9図）。

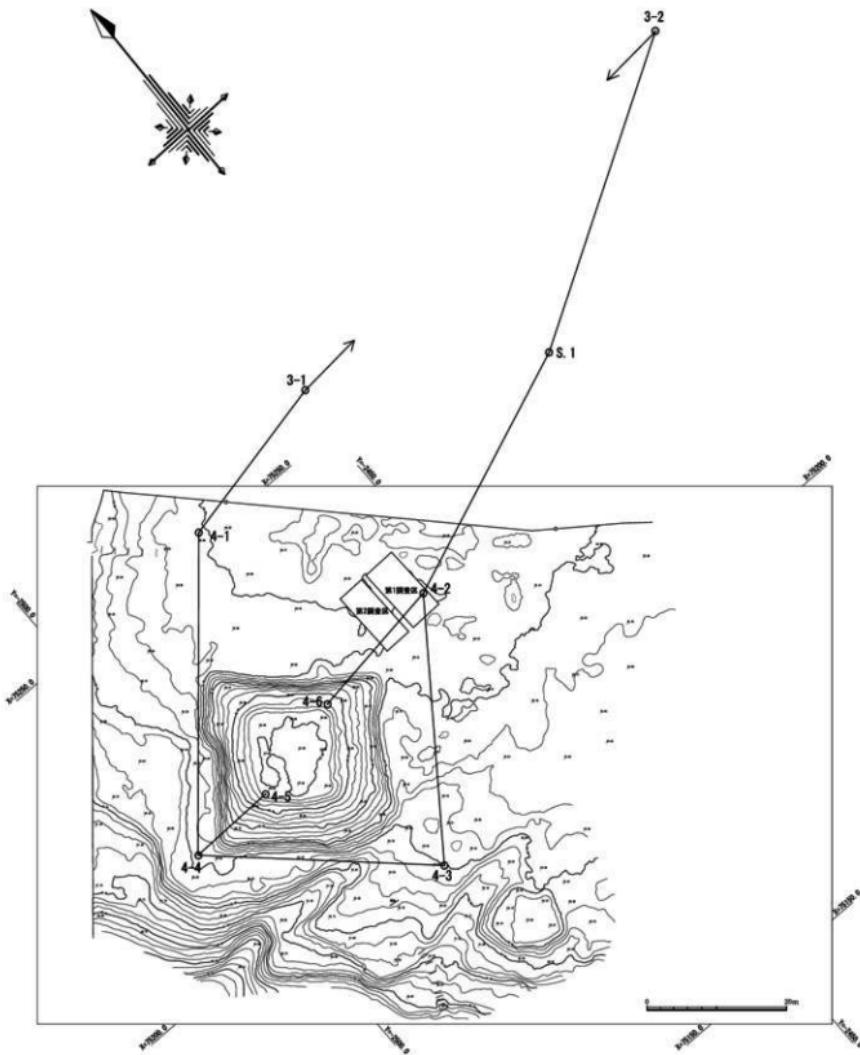
この新たな測量成果にもとづき、1974年調査時の測量図（第5図）との照合をおこなった。しかしながら、測量基準点等が明示されていないこと、墳丘の形状も若干変化していることなど厳密な照合が困難であったため、1974年調査で最も形状が判明している東側突出部を調査の対象とし、旧トレンチの位置確認も念頭におきながら、調査を実施することとした。

1974年調査で検出された突出部および周溝のおおよその位置関係を、新たな測量図上で確認したうえで、東側突出部先端北半の推定位置に調査区を設定した。調査区は、X=75220.0のライン付近に突出部の中軸線がくるとの推定から、座標の方眼にあわせて設定し、周溝の外周が調査区内におさまる範囲を考慮し、1辺10mの正方形とした。また、土層観察用の幅1mの南北畦を調査区中央西寄りに設け、これを挟み東側を第1調査区（5×10m）、西側を第2調査区（4×10m）としている。

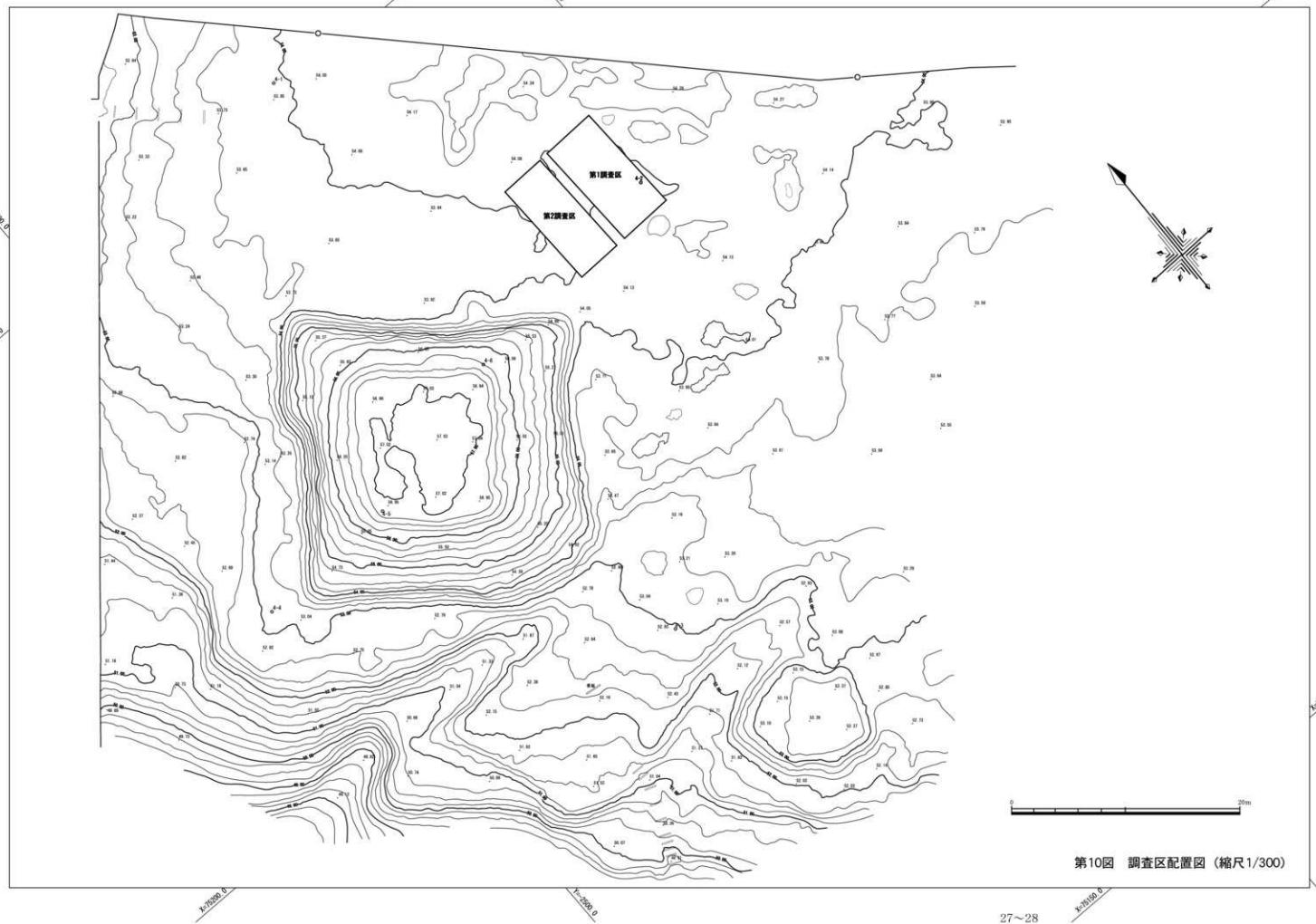
（次山 淳）

第2表 調査区基準杭一覧

杭名	X座標	Y座標	標高(m)	杭名	X座標	Y座標	標高(m)
3-1	75256.026	-2448.816	54.347	4-4	75216.280	-2503.809	53.025
3-2	75262.033	-2377.189	53.328	4-5	75216.644	-2490.721	
4-1	75251.309	-2473.559	53.959	4-6	75220.641	-2475.650	
4-2	75223.746	-2454.798	53.797	S1	75237.533	-2418.611	54.219
4-3	75192.102	-2477.931	52.938				（世界測地系に基づく）



第9図 調査区基準杭配置図（縮尺1/700）



2. 発掘調査の成果

(1) 第1調査区

東側突出部及び周溝の形状と規模を確認するため、東側突出部先端部の北半部に調査区を設定した。

表土を約0.15m掘り下げたところで黄褐色粘質土の地山を検出した。その際、調査区南東隅の箇所において、1974年の富山市調査時のトレンチ跡を確認した。このトレンチ跡内の埋戻し土を約0.05m取り除いた所で旧トレンチ底面に達した。また、調査区北側において樹木痕と考えられる土坑を2基検出した。

地山検出面においては、南側から西側へ帯状に、緩やかな弧を描いて巡る暗赤灰色粘質土層を検出し、これが周溝であると判断した。そして、周溝平面プランを精査するとともに、調査区中央南寄りのa-b地点間を基準にして幅0.5mの土層観察用のアゼを設定（以後、周溝アゼと表記する）した後、周溝内の掘り下げをすすめた。

まず、突出部前面部の中央に位置する南側断面を基準にして周溝内の堆積状況を説明する。合わせて、周溝アゼ断面と西側断面の土層を補足説明する。南側断面の堆積状況とはやや異なる周溝アゼ断面下層部分及び西側断面下層部分は、これとは分けて説明する。

南側断面第2層（周溝アゼ断面第1層、西側断面第2層）は暗赤灰色粘質土で、周溝埋土の最上層にあたる。この層は南側断面から西側断面にかけて、約0.1mの厚さで広く堆積している。この下層には南側断面第3層（周溝アゼ断面第2層）の黒褐色粘質土が見られるが、南側断面では約0.2mと比較的分厚く堆積するのに対して、周溝アゼ断面の箇所では厚さ約0.1mとなる。この層は西側断面には現れていない。

南側断面第4層（周溝アゼ断面第5層、西側断面第4層）は同じ黒褐色粘質土だが、2~10mm程度の橙色ブロックを5%程含む層である。この層は南側断面から西側断面にかけて、墳丘側から流れ込んで堆積している。周溝アゼ断面と西側断面では、この層の上層に極暗褐色粘質土（周溝アゼ断面第3層、西側断面第3層）が、同じく墳丘側から流れ込んで堆積している。周溝アゼ断面では、さらに墳丘側から第8層の褐色粘質土が薄く堆積する。また、周溝アゼ断面では第3層と第5層との間に、周溝外側から流れ込んだ第4層が堆積している。

南側断面第5層（周溝アゼ断面第6層、西側断面第5層）は黒色粘質土である。この層は南側断面から西側断面にかけて、周溝外側から流れ込んで堆積している。周溝アゼ断面では、同じく周溝外側から第6層の暗褐色粘質土が堆積する。

南側断面第6層（周溝アゼ断面第9層、西側断面第8層）は、南側断面第5層と同じく黒色粘質土だが、混入するブロックの違いから分けられる。この層は南側断面から西側断面にかけて、墳丘側から流れ込んで分厚く堆積している。その厚さは最も分厚いところで、南側断面において約0.25m、周溝アゼ断面において約0.2m、西側断面において約0.3mである。西側断面では第8層の上層に第7層の黒褐色粘質土が堆積する。

そして、南側断面では下層部分に、しまりのやや弱い黒褐色粘質土の第7層と周溝外側から流れ込んだ様子が観察される第8層の暗褐色粘質土が、周溝底面を覆うように堆積する。

周溝アゼ断面では、第6層・第9層の下層に黒色粘質土の第10層・第11層が堆積する。第

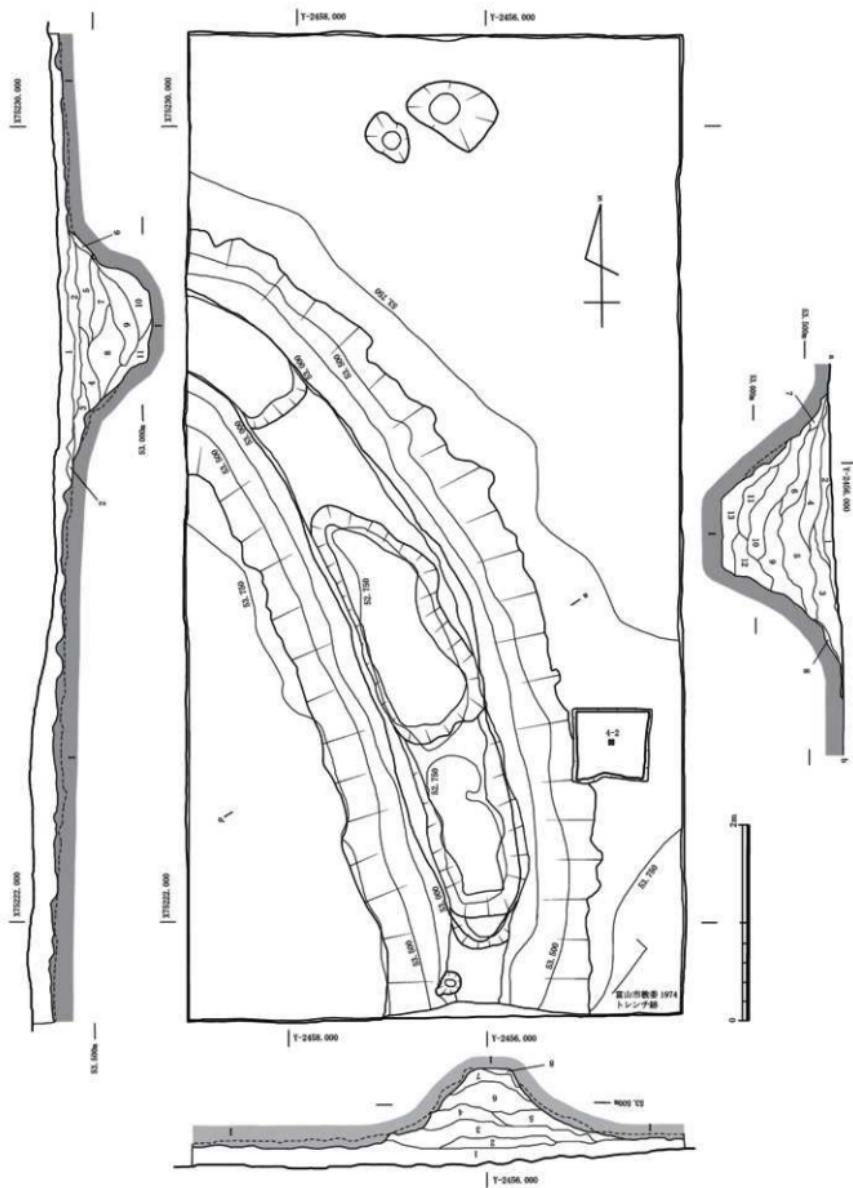
10層・第11層は同質の層だが、混入物の割合によって分けられる。第10層は3mm程度の橙色の粒を2%、第11層は1~5mm程度の橙色の粒を7%含む。第10層は周溝外側から流れ込んでいる。第11層も周溝外側から流れ込んだものと考えられる。この下層にはしまりのやや弱い黒褐色粘質土の第12層・第13層が堆積する。第12層・第13層も同質の層で、混入物の違いで分けられる。第12層は1~3mm程度の橙色の粒を7%、橙色土のブロックを25%混入する。第13層は1~5mm程度の橙色の粒を15%含み、また5~10cmの橙色土のブロックが周溝外側から流れ込む。第12層・第13層の橙色土のブロックは地山起源の混入物と判断される。第12層は墳丘側から流れ込む。第13層は周溝外側から流れ込み周溝底面を覆うように堆積している。

西側断面では、第8層の下層に黒色粘質土の第9層が堆積している。第8層と第9層は同質だが、混入するブロックの違いから分けられる。この下層には黒褐色粘質土の第10層が周溝外側から流れ込んで堆積する。第10層も周溝外側からの流れ込みと考えられる。第11層は褐色粘質土で、墳丘側から流れ込んで堆積している。1~2mm程度の黒褐色の粒を20%程含むが、とりわけ第10層との境界に黒褐色の粒が色濃く見られた。

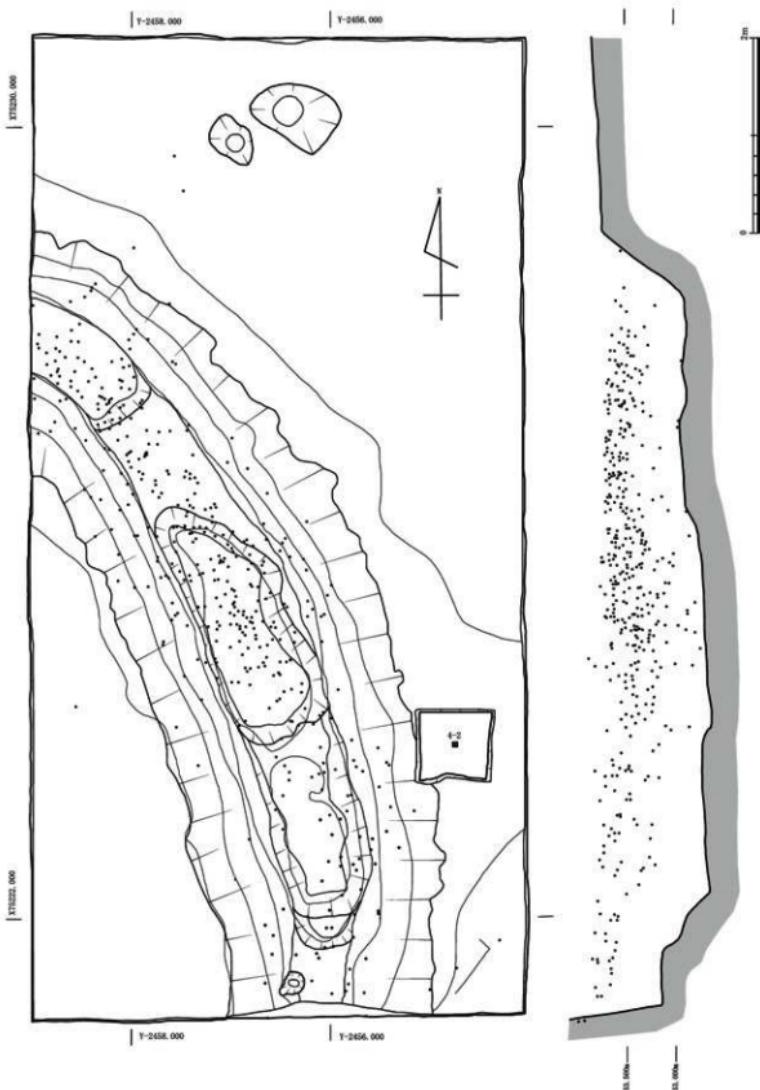
周溝の平面形は突出部前面部の形状に沿って緩やかな弧を描いている。周溝の断面形は逆台形を呈する。周溝内側斜面・外側斜面とともに下半部は急傾斜で立ち上がるが、上端付近は傾斜が緩やかになっている。周溝の幅は南側断面の上端で約2.0m、下端で約0.5m、周溝アゼ断面の上端で約2.0m、下端で約1.0m、西側断面の上端で約2.6m、下端で約0.8mである。また周溝の深さは南側断面で約0.8m、周溝アゼ断面で約1.2m、西側断面で約0.85mである。最深部の標高は南側断面で53.150m、周溝アゼ断面で52.695m、西側断面で52.889mである。よって、突出部前面部の中央に位置する南側断面の箇所において、周溝下端の幅が最も狭く、また最深部の標高も高くなっている。

周溝底面はこのように南側断面の箇所の標高が最も高く、ここから西側断面にかけて階段状になっている。引き続いて周溝底面の形状を具体的に説明する。南側断面の箇所には、調査区内で長さ約0.55mの平坦面が見られる。この平坦面の西端、つまり周溝内側斜面下端(墳裾)から円形のビットを1基検出した。直径は上面で約0.22~0.3m、底面で0.1m、深さは約0.05mである。これに関しては橋脚を据えるための柱穴の可能性が考えられるが、樹木痕かもしれない。この平坦面の北側にある次の平坦面までは0.45mほど急激に落ち込んでいる。また、その途中には0.13m下がった所に、底面幅0.3mほどの半円形の小さな段を設けている。北側にある平坦面の長さは約1.6m、幅は北端で約0.4m、南端で約0.8mである。さらに、北側に連続しては、上端の長さ約2.6m、下端の長さ約2.25mの平坦面が見られる。この平坦面はわずかだが約0.08mの深さがあり、周溝内埋葬の可能性が考えられた。だが、この箇所にかかる周溝アゼ断面の土層を見ると、底面の部分にあたる第13層は周溝外側から流れ込んでおり、周溝が埋没するとともに平坦面も埋まっていること、また平坦面北半部の形状は不定形であることから、墓としての利用はなかったと判断した。この平坦面から北西側へ約1mすんだ箇所には一段下がった所に、さらなる平坦面が存在する。この平坦面は西側断面の外側へ伸びている。調査区内での長さは約1.1mを測る。

第1調査区からは約400点の土器片が出土した。土器片は第12図のように周溝内の全体にわたって認められるが、墳丘側から比較的多く出土している。土層との関係では、周溝アゼ断面



第11図 第1調査区平面図・断面図（縮尺1/50）



第12図 第1調査区土器分布図（縮尺1/50）

第1調査区断面図層名

南側断面

[表土]	1	Hue10YR1.7/1	黒色粘質土
[周溝埋土]	2	Hue2.5YR3/1	暗赤灰色粘質土
	3	Hue7.5YR3/2	黒褐色粘質土
	4	Hue7.5YR3/1	黒褐色粘質土 (2~10mm程度橙色ブロック5%含む)
	5	Hue7.5YR1.7/1	黒褐色粘質土 (1mm程度橙色ブロック5%含む)
	6	Hue10YR2/1	黒色粘質土 (5mm程度明黄褐色ブロック7%含む)
	7	Hue7.5YR3/2	黒褐色粘質土 (1~5mm程度橙色ブロック10%含む)
	8	Hue10YR3/3	暗褐色粘質土
[地山]	1	Hue7.5YR3/3	黄褐色粘質土

周溝アゼ断面 (a - b 地点間)

[周溝埋土]	1	Hue2.5YR3/1	暗赤灰色粘質土
	2	Hue7.5YR3/2	黒褐色粘質土
	3	Hue7.5YR2/3	極暗褐色粘質土 (7mm程度明褐色ブロック3%含む)
	4	Hue10YR2/3	黒褐色粘質土 (1mm程度橙色ブロック1%含む)
	5	Hue7.5YR3/1	黒褐色粘質土 (2~10mm程度橙色ブロック5%含む)
	6	Hue7.5YR1.7/1	黒色粘質土 (1mm程度橙色ブロック1%含む)
	7	Hue2.5YR3/1	暗赤灰色粘質土
	8	Hue10YR4/4	褐色粘質土 (3mm程度橙色ブロック30%含む)
	9	Hue10YR2/1	黒色粘質土 (5mm程度橙色ブロック7%含む)
	10	Hue7.5YR1.7/1	黒色粘質土 (3mm程度橙色ブロック2%含む)
	11	Hue7.5YR1.7/1	黒色粘質土 (1~5mm程度橙色ブロック7%)
	12	Hue7.5YR3/1	黒褐色粘質土 (1~3mm程度橙色ブロック7%含む)
	13	Hue5YR2/1	黒褐色粘質土 (1~5mm程度橙色ブロック15%含む)
[地山]	1	Hue7.5YR3/3	黄褐色粘質土

西側断面

[表土]	1	Hue10YR1.7/1	黒色粘質土
[周溝埋土]	2	Hue2.5YR3/1	暗赤灰色粘質土
	3	Hue7.5YR2/3	極暗褐色粘質土 (1mm程度明褐色ブロック3%含む)
	4	Hue7.5YR3/1	黒褐色粘質土 (2~10mm程度橙色ブロック5%含む)
	5	Hue7.5YR1.7/1	黒色粘質土 (1mm程度橙色ブロック1%含む)
	6	Hue10YR3/3	暗褐色粘質土
	7	Hue10YR2/2	黒褐色粘質土 (1~3mm程度橙色ブロック2%含む)
	8	Hue10YR2/1	黒色粘質土 (5mm程度明黄褐色ブロック7%含む)
	9	Hue10YR1.7/1	黒色粘質土 (2mm程度褐色ブロック3%含む)
	10	Hue10YR2/2	黒褐色粘質土 (4~7mm程度黄褐色ブロック15%含む)
	11	Hue7.5YR4/4	褐色粘質土 (1~2mm程度黒褐色ブロック20%含む)
[地山]	1	Hue7.5YR3/3	黄褐色粘質土

第3層・第4層・第5層、そして西側断面第3層・第4層からとりわけ多数の土器片が出土した。このように周溝アゼ断面及び西側断面の箇所では周溝上部の墳丘側に偏って土器片が出土した反面、周溝アゼ断面第9層及び西側断面第9層以下の土層からの出土数はあまり多くない。このことから、この範囲では周溝の中ほど程度まで埋没した後に、墳丘側から土器片が多数流入したものと判断できる。西側断面から0.65mの地点からは、西側断面第4層において装飾壺の返し付蓋が出土した(第16図-4)。また、調査区北壁から南へ約5.5~5.8mの範囲からは、周溝アゼ断面第9層において大形壺の口縁部(第16図-1)や胸部の破片が合計11点出土した。この他、周溝アゼ断面と西側断面の間において、周溝アゼ断面第11層・第12層の下部(標高52.900m以下)や第13層からも土器片が出土しており、周溝外側から流れ込む例が比較的多く見られる点は注意される。周溝アゼ断面と南側断面との間では、周溝下半部からはほとんど土器が出土しておらず、同じく周溝の中ほど程度まで埋まった後に、墳丘側から土器片が流入したものと判断できるが、周溝アゼ断面から西側断面までの範囲と比べてその出土数は少ない。その他、南側断面から北へ0.8m、調査区東壁から西へ0.3m地点の表土と西側断面第3層から鉄釘が1点ずつ出土した。

(小谷望有季・山場愛弓・高橋浩二)

(2) 第2調査区

第1調査区と同様に東側突出部及び周溝の形状と規模を確認するため、東側突出部先端部の北半部側面に調査区を設定した。

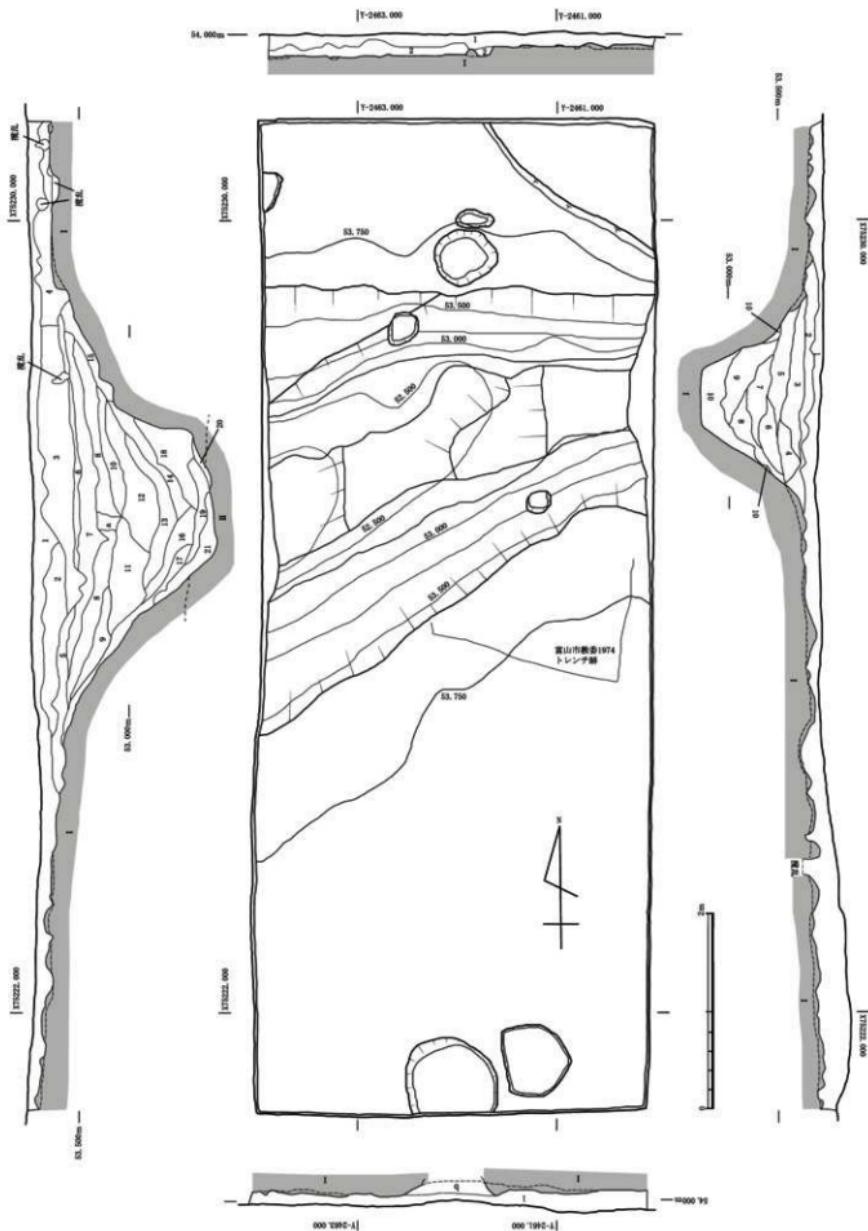
表土を約0.15m掘り下げたところで黄褐色粘質土の地山を検出した。その際、調査区北東側と調査区中央付近に、1974年の富山市調査時のトレンチ跡を確認した。北側断面第2層及び東側断面第2層、西側断面第4層が旧トレンチ埋戻し土にあたる。また、周溝の調査過程において、周溝内側斜面及び外側斜面から炭を多量に含む小形の土坑を検出した。周溝内側斜面の土坑の直径は上面で約0.24m、底面で約0.2mである。周溝外側斜面の土坑の直径は上面で約0.3m、底面で約0.28mである。周溝と北側断面の間でも土坑を2基検出したが、性格は不明である。調査区南壁でも土坑を2基検出したが、これは樹木根の擾乱と判断した。

地山検出面において、北側断面から約1.7~6mの間に周溝の平面プランを確認した。その後、周溝内部の掘り下げをすすめた。東側断面第3層と西側断面第7層は周溝の最上層にあたる。東側断面第3層~第10層、西側断面第7層~第21層は周溝内の土層である。なお、西側断面第2・第3・第5層は周溝よりも上層にあり、耕作土と考えられる。西側断面第6層は黒褐色粘質土で、第3層と第7層の間に薄く堆積している。次に、周溝内の土層を上層から説明する。

東側断面第3層は黒色粘質土で、周溝外側から流れ込んでいるように見える。東側断面第4層は1mm程度の明褐色の粒を3%含む極暗褐色粘質土で、墳丘側から流れ込んでいる。この土層は西側断面第8層と対応する。東側断面第5層は黒褐色粘質土で、周溝外側から流れ込んでいる。東側断面第6層は3~5mm程度の暗黄褐色の粒を7%含む黒色粘質土で、墳丘側から流れ込んで堆積している。東側断面第7層は黒色粘質土である。東側断面第8層は2~4mm程度の黄褐色の粒を10%含む黒色粘質土で、墳丘側から流れ込んでいる。これら東側断面第4層・第6層・第8層は、周溝外側から流れ込み堆積したと判断される層と比較して、明褐色や黄褐色系の粒を多く含んでいる。東側断面第9層は黒褐色粘質土で、周溝外側から流れ込み厚く堆積している。この土層は西側断面第12層と対応する。東側断面第10層はしまりのやや弱い褐色粘質土で、墳丘側から流れ込んだものと考えられ、周溝底面に厚く堆積している。

西側断面第7層は極暗褐色粘質土で、周溝上面を厚く覆って堆積している。西側断面第8層は黒褐色粘質土であり、この層には直径10mm程度の炭が少量含まれていた。第8層の中央に存在するaは、樹木根と思われる擾乱部分である。西側断面第9層は黒褐色粘質土で、墳丘側から流れ込んでいる。西側断面第10層は黒褐色粘質土で、同じく周溝外側から流れ込んだと考えられる西側断面第12層の上層に堆積している。第11層は極暗褐色粘質土で、墳丘側から厚く堆積している。西側断面第13層は極暗褐色粘質土で、第14層・第16層を覆うように堆積している。西側断面第14層は黒褐色粘質土で、周溝外側から流れ込んでいる。西側断面第15層は暗赤褐色粘質土で、同じく周溝外側から流れ込んでいる。西側断面第16層・第17層・第19層は墳丘側から流れ込んだ土層で、上層のものと比べて薄く堆積している。これら第16層・第17層・第19層は黒褐色粘質土で、地山起源の黄褐色土の粒を含んでいる。西側断面第18層は褐色粘質土で、周溝外側から流れ込んでいる。西側断面第20層・第21層はともに明褐色粘質土で、前者には3mm程度の黒色粒が3%含まれる。

周溝の平面形は、下端においては突出部の形状に沿って緩やかな弧を描いている。これに対



第13図 第2調査区平面図・断面図（縮尺1/50）

第2調査区断面図層名

西側断面

[表土]

1	Hue10YR2/2	黒褐色粘質土
2	Hue7.5YR2/2	黒褐色粘質土 (1mm程度の明黄褐色粒を1%含む)
3	Hue7.5YR2/3	極暗褐色粘質土 (1~2mm程度の黄褐色粒を3%含む)
4	旧トレンチ埋め戻し土	
5	Hue10YR2/3	黒褐色粘質土 (1~2mm程度の黄褐色の粒を5%含む)
6	Hue10YR2/2	黒褐色粘質土 (2mm程度の橙色粒を2%含む)
7	Hue7.5YR2/3	極暗褐色粘質土 (1mm程度の明黄褐色粒を1%含む)
8	Hue10YR2/2	黒褐色粘質土 (1cm程度の炭を少量含む、aは擾乱部分)
9	Hue10YR2/3	黒褐色粘質土 (1mm程度の明黄褐色粒を2%含む)
10	Hue10YR2/3	黒褐色粘質土 (3mm程度の明黄褐色粒を7%含む)
11	Hue7.5YR2/3	極暗褐色粘質土 (2mm程度の明黄褐色粒を5%含む)
12	Hue7.5YR2/1	黒色粘質土 (2mm程度の橙色粒を7%含む、土器片を含む)
13	Hue7.5YR2/3	極暗褐色粘質土 (1~5mm程度の明黄褐色粒を10%含む)
14	Hue10YR2/3	黒褐色粘質土 (1~3mm程度の明褐色粒を5%含む)
15	Hue5YR3/3	暗赤褐色粘質土 (1mm程度の明褐色粒を1%含む)
16	Hue10YR2/3	暗赤褐色粘質土 (1~3mm程度の黄褐色粒を5%含む)
17	Hue10YR2/3	黒褐色粘質土 (2mm程度の明黄褐色粒を3%含む)
18	Hue7.5YR4/6	褐色粘質土 (3mm程度の暗赤褐色粒を5%含む、極暗褐色土をまだらに30%含む)
19	Hue7.5YR2/2	黒褐色粘質土 (2mm程度の褐色粒を3%含む)
20	Hue7.5YR5/6	明褐色粘質土 (3mm程度の黒色粒を3%含む)
21	Hue7.5YR3/4	明褐色粘質土
I	Hue7.5YR5/6	黄褐色粘質土
II	Hue10YR6/6	明黄褐色粘質土 (礫を含む)

東側断面

[表土]

1	Hue10YR1.7/1	黒色粘質土
2	Hue10YR1.7/1	2~4cm程度の褐色粒を含む
3	Hue10YR1.7/1	黒色粘質土
4	Hue7.5YR2/3	極暗褐色粘質土 (1mm程度の明褐色粒を3%含む、第3層と同質だが粒の割合が多い、土器片含む)
5	Hue7.5YR2/2	黒褐色粘質土 (1~2mm程度の褐色粒を2%含む、土器片含む)
6	Hue10YR2/1	黒色粘質土 (3~5mm程度の暗黃褐色粒を7%含む、第5層と同質だが粒の割合が多い)
7	Hue10YR1.7/1	黒色粘質土 (2mm程度の褐色粒を3%含む)
8	Hue7.5YR2/1	黒色粘質土 (2~4mm程度の黄褐色粒を10%含む、第7層と同質だが、粒の割合が多い)
9	Hue10YR2/2	黒褐色粘質土 (4~7mm程度の黄褐色粒を15%含む)
10	Hue7.5YR4/4	褐色粘質土 (1~2mm程度の黒褐色粒を2%含む)
I	Hue10YR4/4	黄褐色粘質土

北側断面

[表土]

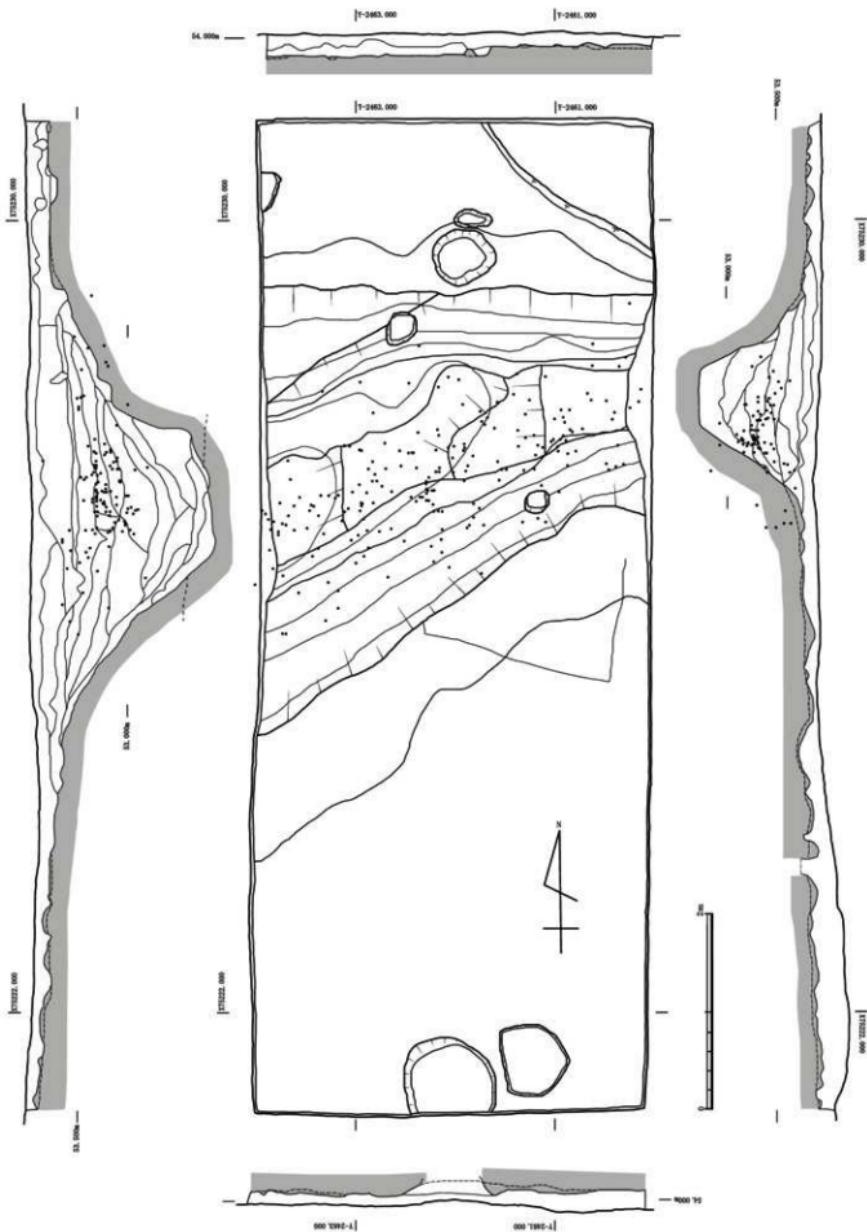
1	Hue10YR3/2	黒褐色粘質土 (1mm程度の褐色粒を1%含む)
2	旧トレンチ埋め戻し土	
I	Hue7.5YR4/4	黄褐色粘質土

南側断面

[表土]

1	Hue7.5YR2/3	黒褐色粘質土 (暗褐色土を5%含む、穴部分に掘り返し時の黄色土が見られる)
[地山]	I Hue10YR4/6	黄褐色粘質土 (暗褐色土粒を15%含む)
穴埋め土	b	褐色 (地山起源の黄褐色の粒を多量に含む)

して、上端は東側断面の箇所では幅狭く、周溝中程から西側断面にかけて周溝外側斜面が方形部側の周溝へ向かって急激に広がっている。突出部外側斜面の西半部において、上端から1段低くなった段状の部分がこれに対応する。周溝の断面形は底面が幅狭く、上面が広い逆台形を呈する。周溝内側斜面に対して、外側斜面の立ち上がりは急傾斜となっている。周溝の幅は、突出部前面部側の東側断面では上端幅約2.2m、下端幅約0.6mであるのに対して、突出部基部側により近い西側断面では上端幅約4.5m、下端幅約1mを測る。また、周溝の深さは東側断面では約1.07m、西側断面では約1.54mを測る。最深部の標高は東側断面では52.738m、西側断面では52.158mである。すなわち、周溝は突出部前面部側ほど幅狭くて浅く、これに対して

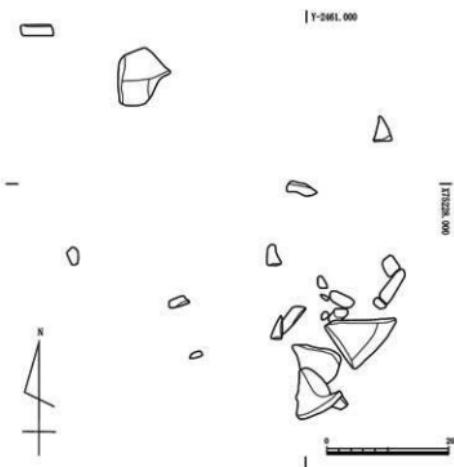


第14図 第2調査区土器分布図（縮尺1/50）

突出部基部側に近いほど幅広くて深くなっている。周溝の底面は、東側断面から西へ約1mの地点まではほぼ平坦だが、ここから西側断面へ向かって急傾斜で下降している。東側断面では周溝底面の地山が黄褐色粘質土（第Ⅰ層）であるのに対して、西側断面では礫を含む明黄褐色粘質土（第Ⅱ層）となっているのは、下層の地山を検出したことによる。

第2調査区からは土器片約300点と石鏃1点が出土した。土器片は周溝内の墳丘側から比較的多く出土している。また、周溝内の西半部において比較的多く出土する傾向が見られる。とくに土器片が多く出土したのは、東側断面では第5層～第8層の墳丘側の箇所、そして西側断面では第7層・第8層・第10層・第12層の中央部である。これらの下層に位置する東側断面第9層・第10層及び西側断面第13層～第21層からはほとんど土器が検出されていないことから、周溝のほど程度まで埋没した後に、土器片が多数流入したものと判断できる。第15図は大形壺の口縁部から肩部にかけての破片の出土状況であり、北側断面から3.2～3.3m、東側断面から1m地点の東側断面第7層にあたる層からまとめて出土した。これは第1調査区出土の大形壺破片とも接合するものである（第16図-1）。石鏃は、北側断面から3.07m、東側断面から2.69m地点の西側断面第8層にあたる層から1点が出土した。

（金田朋子・清水俊輝・寸田彩加・高橋浩二）



第15図 土器出土状況（縮尺1/80）

第5章 出土遺物

今回の調査では、第1調査区と第2調査区から合わせて約700点の土器片などが出土した。ここではその内、図化できた12点を取り上げて説明する。

1は、弥生土器もしくは土師器の大形壺の口縁部から肩部にかけてである。第1調査区から2点、第2調査区から6点出土した破片が接合した。口縁部径は27cmと推定される。口縁部は幅が7.8~8cmの二重口縁を呈し、外反している。口縁部の外面下半部には一対の円形浮文が一定の間隔を置いて4箇所に貼り付けられている。円形浮文の直径は約3cmで、中央には竹管文が押印されている。頸部は強く屈曲する。頸部と肩部の境には外面に刻目突帯が貼付されている。全体的に風化が激しいが、口縁部外面にはナデ調整が認められる。色調は橙色で、肩部内面のみ灰色である。胎土は密であり、2mm程度の砂粒が含まれる。焼成は良好である。接合はしないが、色調・胎土・焼成とともに同質の胴部破片が複数点出土している。

2は、第2調査区周溝内から出土した弥生土器もしくは土師器の壺の口縁部破片である。口唇部は一部欠損している。口縁部径は22.3cmと推定される。口縁部下端が垂下しており、有段口縁状をなす。有段口縁部の幅は2.6~2.8cmである。外面にはナデ調整が施されている。色調は浅黄橙色である。胎土は密である。焼成は良好である。

3は、弥生土器長頸壺の口縁部から頸部である。第1調査区から3点出土した破片が接合した。口縁部径は11cmと推定される。口縁部内外面にはナデ調整、頸部にはハケ調整が施されている。色調は橙色である。胎土は密で、1~2mm程度の砂粒が含まれる。焼成は良好である。

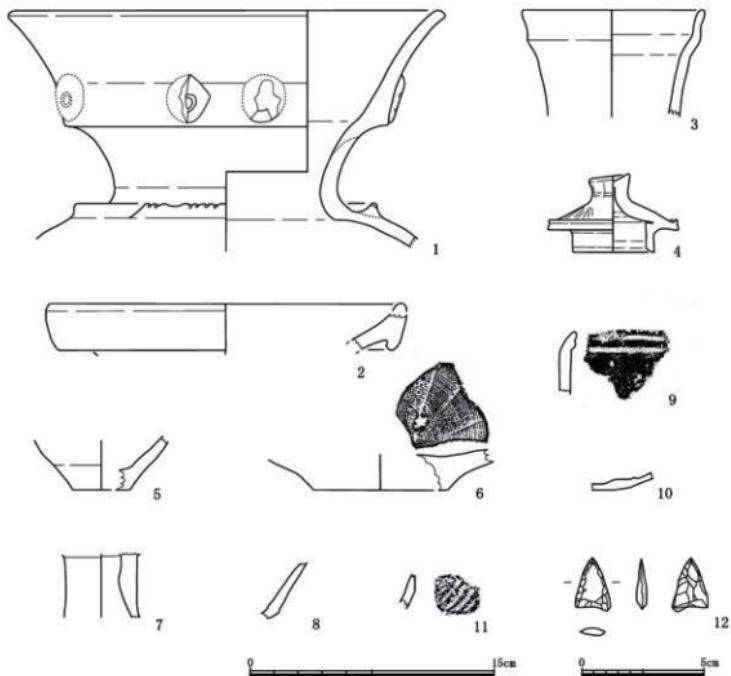
4は、第1調査区周溝内から出土した装飾壺の返し付蓋である。一部が欠損している。高さは4.8cmで、つまみの直径は2.5cmを測る。蓋の直径は6.7cm、返し部分の直径は5.1cmと推定される。返し部分は粘土紐を貼り付けることによって作られている。つまみ部分は中央がわずかに窪んでいる。外面にはヘラミガキ、内面にはナデ調整が施されている。色調は明黄褐色である。胎土は密で、焼成は良好である。県内では、月影II式期から白江式期（弥生時代終末期または古墳時代前期初頭）に比定される富山市翠尾I遺跡や同市南部I遺跡、射水市中山南遺跡や同市串田新遺跡、高岡市下老子坂川遺跡、氷見市小久目A遺跡などから同様の返し付蓋が出土している。

5は、弥生土器壺の底部である。第1調査区から2点、第2調査区から1点出土した破片が接合した。底部径は3.6cmを測る。色調は、外面底部は赤色で、内面はにぶい黄橙色である。胎土は密であり、1~2mm程度の砂粒が含まれる。焼成は良好である。

6は、第2調査区周溝内から出土した弥生土器壺の底部破片である。底部径は約8cmと推定される。外面にはナデ調整が施されている。内面にはクモの巣状のハケ目痕が認められる。色調は、外面が浅黄橙色で、内面が浅黄色である。胎土は密であり、焼成は良好である。

7は、第1調査区周溝内から出土した弥生土器もしくは土師器の高杯脚部上半部の破片である。外面上部にはナデ調整が施されている。色調は浅黄橙色である。胎土は密であり、直径1~2mm程度の砂粒が含まれる。焼成は良好である。

8は、第1調査区周溝内から出土した弥生土器壺または鉢、高杯の口縁部破片である。4点の



第16図 出土遺物（1～11は縮尺1/3、12は縮尺1/2）

破片が接合した。口唇部は欠損している。口縁部下端には段が付くが、その屈曲はあまり強くない。内外面は赤彩されている。また、内外面にはヘラミガキが施されている。胎土は密であり、直径1mm程度の砂粒が多く含まれる。焼成は良好である。

9は、第1調査区から出土した縄文土器又は弥生土器・土師器で、器種は不明である。上端部に回線が1条施される。色調は褐色である。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好である。

10は、第2調査区表土から出土した須恵器杯の底部破片である。外面及び内面にはナデ調整が施されている。色調は灰色である。胎土は密であり、焼成は良好である。

11は、第2調査区周溝内から出土した縄文土器深鉢または壺の胴部破片である。外面には縄文が施されている。色調は、外面が灰褐色で、内面が黄褐色である。胎土はやや粗く、1mm程度の砂粒が少量含まれる。焼成は良好である。

12は、第2調査区周溝内から出土した石鐵である。長さ2.1cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、重量0.8gを測る。材質は安山岩である。

（金田朋子、小谷望有季、清水俊輝、寸田彩加、山場愛弓・高橋浩二）

第6章 まとめ

今回の調査では、東側突出部及び周溝の形状と規模を確認するための発掘を行った。これまでの記述をもとに、第1次調査の成果は次の諸点にまとめることができる。

1. 杉谷4号墳は杉谷丘陵（友坂段丘）の南西縁から南東縁にかけての標高約53～54mの所に立地する。現況では竹林および樹木に覆われているが、神通川およびその支流である井田川や広大な富山平野を見晴らすことが可能である。

2. 杉谷4号墳は従来の指摘どおり、方形部の隅角が突出する四隅突出型墳丘墓であることが明らかになった。

3. 発掘の結果、第1調査区と第2調査区において東側突出部先端部の北半部における墳裾及び周溝を検出した。両調査区の平面図を統合させたものが第17図である。周溝内側斜面の下端を墳裾とすると、墳裾は第1調査区側では標高53.000mの等高線に沿ってわずかに弧を描きながら巡る。第2調査区側では52.000～52.750mの等高線の間に墳裾が構築されている。突出部先端部の形状は、富山市教育委員会1974では突出部側面から突出部前面にかけて隅角部が丸くカーブして描かれているが（13頁第5図）、今回の調査において隅角部は直角に近い角度で曲折することが明らかにされた。

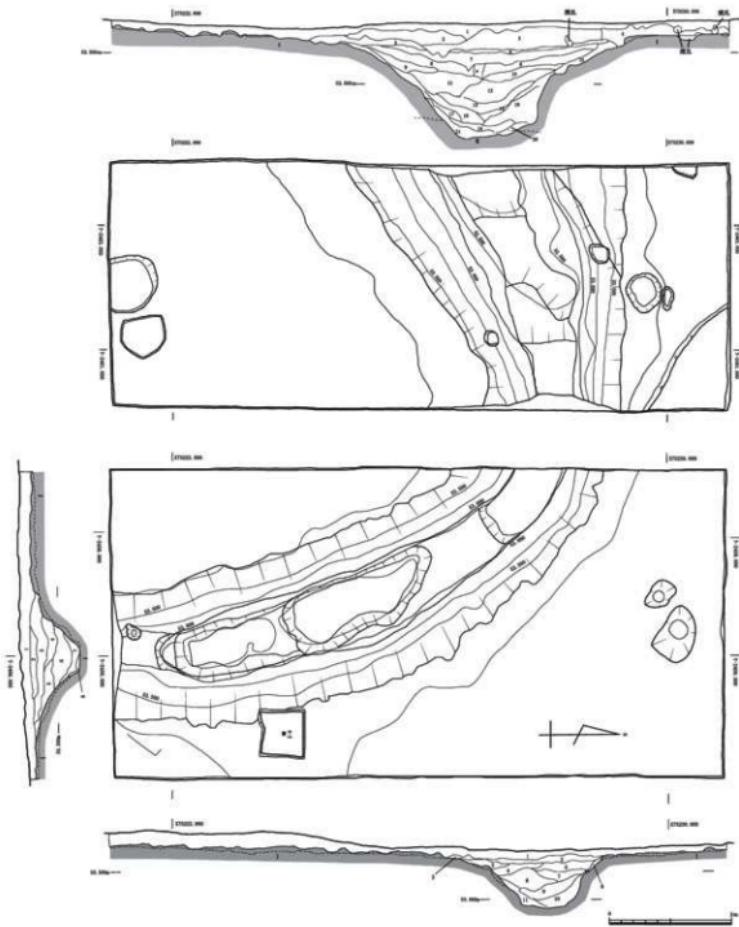
4. 東側突出部の長さに関しては、現方形部隅角墳裾から測ると約10.5mである。突出部基部を第5図の方形部北東側墳裾線及び方形部南東側墳裾線にとってこの箇所から測ると、突出部の長さは約14～15mと推定される。また、東側突出部の幅に関しては、今回の調査で約8m分を確認したが、これを第5図にあてはめると先端部の最も広がった箇所の幅は約14～15.5mになることが推定される。

5. 突出部上に盛土は遺存しておらず、その存否を確認するには至らなかった。

6. 周溝の幅及び深さは第1調査区南側断面で幅約2.0m、深さ約0.8m、西側断面で幅約2.6m、深さ約0.85m、第2調査区東側断面で幅約2.2m、深さ約1.07m、西側断面で幅約4.5m、深さ約1.54mである。このように、突出部前面部の中央に位置する第1調査区南側断面の周溝が幅狭くて浅く、突出部基部側に位置する第2調査区西側断面の周溝が幅広くて深くなっている。周溝最深部の標高も第1調査区南側断面で53.150m、西側断面で52.889m、第2調査区東側断面で52.738m、西側断面で52.158mというように突出部基部側に近づくほど深くなる。

7. 周溝底面は第1調査区の南側断面から西側断面、そして第2調査区東側断面までは階段状に緩やかに傾斜するが、第2調査区東側断面の西1mの地点からは西側断面へ向かって急傾斜で下降している。

8. 第1調査区、第2調査区合わせて約700点の土器片が出土した。その出土分布を表したもののが第18図である。土器片は、第1調査区では周溝アゼ断面第3層～第5層、そして西側断面第3層・第4層のように周溝上半部の墳丘側から偏って出土した。第2調査区では東側断面第5層～第8層の墳丘側の箇所、そして西側断面では第7層・第8層・第10層・第12層のように同じく周溝上半部からまとまって出土した。このように、周溝底部や下層部からの出土数は少なく、周溝が中ほど程度まで埋没した後に、土器片が多数流入したものと判断できる。第18

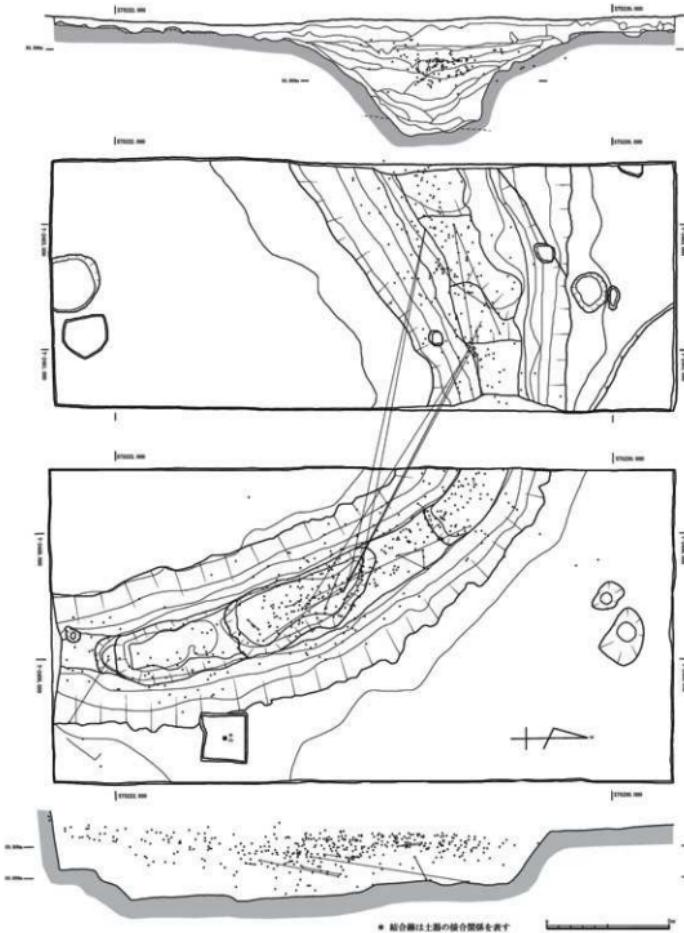


第17図 第1調査区・第2調査区平面図（縮尺1/80）

図の結合線は土器の接合関係を表しているが、このように離れた地点における土器の接合例が比較的多く認められることは、原位置を離れて土器が流入していることを裏付ける。

9. 杉谷4号墳の築造時期を推定させる土器資料としては、返し付蓋と大形壺がある。これらは弥生時代終末期または古墳時代前期初頭に比定される月影式から白江式に属するものである。

杉谷4号墳については、1974年に富山市教育委員会が調査して以来、38年ぶりの発掘調査と



第18図 第1調査区・第2調査区土器分布図（縮尺1/80）

なった。北陸の四隅突出型墳丘墓あるいは北陸最大級の弥生時代墳墓として不可欠な研究資料であるにもかかわらず、これまで十分な調査が行われてきたわけでは必ずしもない。今後はさらなる調査をすすめ学術的な意義を明らかにすることが重要である。そして、それは単に杉谷4号墳に対する認識を深めるだけでなく、杉谷古墳群の出現や変遷を考える上でも重要な知見をもたらすと言えるだろう。

（高橋浩二）

図 版



1 杉谷4号墳全景（北東から）



2 発掘前全景（北東から）



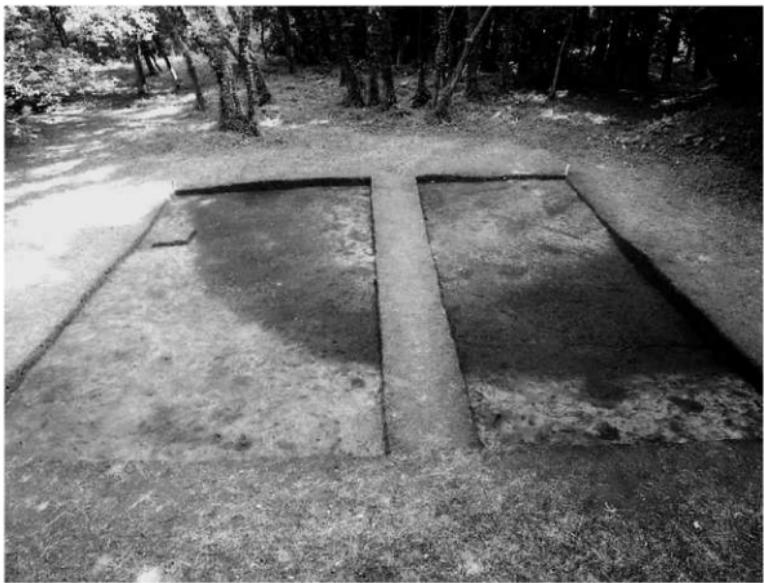
3 同左（西から）



4 調査区設定作業



5 発掘調査作業



6 周溝検出状況（北から）



7 同上（南西から）



8 第1調査区土器検出状況（返し付蓋）（東から）



9 第1調査区土器検出状況（大形壺）（東から）



10 第2調査区土器検出状況（大形壺）（北から）



11 周溝完掘状況（北から）



12 同上（東から）



13 周溝完掘状況（南西から）



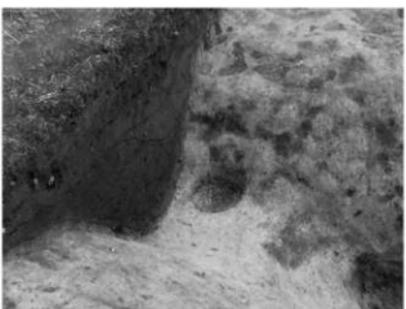
14 第1調査区周溝底面の状況（南から）



15 同左（北から）



16 第1調査区南側断面（北から）



17 第1調査区南側断面ピット検出状況（東から）



18 第1調査区周溝アゼ断面（北から）



19 第1調査区西側断面（東から）



20 第2調査区完掘状況（東から）



21 第2調査区周溝底面の状況（北西から）



22 第2調査区周溝底面の状況（西から）



23 第2調査区東側断面（西から）



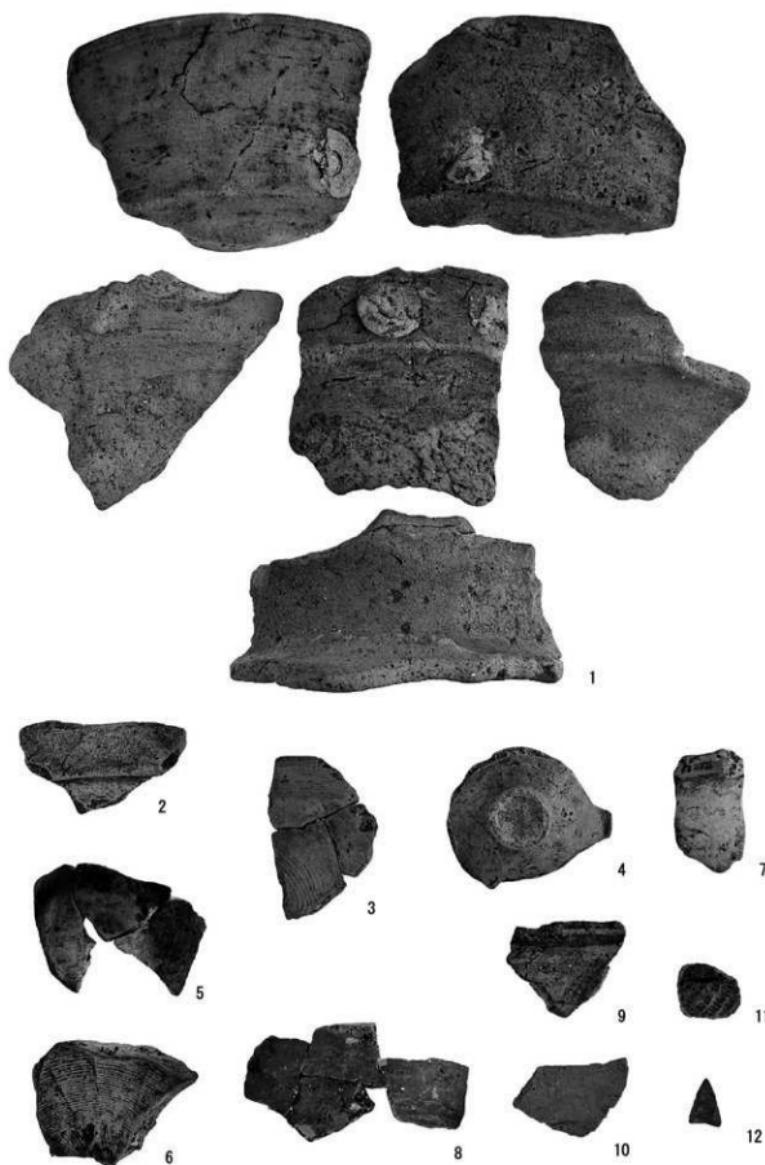
24 第2調査区西側断面（東から）



25 大形壺頸部



26 返し付蓋



ふりがな	すぎたに 4 ごうふん ーだい 1 じは くつちようさほう こくしょー				
書名	杉谷 4 号墳 - 第 1 次発掘調査報告書 -				
副書名					
巻次					
シリーズ名					
シリーズ番号					
編著者名	高橋浩二(編)、次山淳、金田朋子、小谷望有季、清水俊輝、寸田彩加、山場愛弓				
編集機関	富山大学人文学部考古学研究室				
所在地	〒930-8555 富山県富山市五福3190 TEL 076 (445) 6195				
発行年月日	2014/3/31				
ふりがな 所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積
すぎたに 4 ごうふん 杉谷 4 号墳	富山市	36度 40分 40秒	137度 8 分 19秒	20120730 ~20120831	90m ²
調査原因					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
杉谷 4 号墳	墳墓・古墳	弥生～古墳	四隅突出型墳丘墓	弥生土器・ 土師器、須 恵器、縄文 土器、石鐵	四隅突出型墳丘墓で ある富山市杉谷 4 号墳 の発掘調査を 38 年ぶり に実施した。今回の 調査では東側突出部先 端部の北半部における 墳裾と周溝を検出した。 周溝から約 700 点の土 器片が出土した。杉谷 4 号墳の築造時期を推 定させる土器資料とし て返し付蓋や大形壺が 出土したが、具体的な 築造時期を明らかにす るには至らなかった。

2014年3月24日印刷

2014年3月31日発行

杉谷 4 号墳

- 第 1 次発掘調査報告書 -

編集・発行 富山大学人文学部考古学研究室

〒930-8555 富山県富山市五福3190

TEL 076-445-6195

印 刷 株式会社 チューエツ